

水の文化

洗あらう



洗あらう



- 波平恵美子「水とキヨメ」
- 山折哲雄「涙はなぜ美しいのか」
- 大場 修「風呂はハレ空間だった」
- 寺田 實「土地の文化を知らないと洗濯機は作れない」
- 藤井徹也「白もの信仰と清潔な香り」
- 編集部「清潔感を洗う」
- 松本 葉「シャボンの香り」
- 水の文化楽習実践取材「水環境ネット東北」
- 古賀邦雄 水の文化書誌「雨乞い」

水とキヨメ

きれいときたない



波平恵美子

お茶の水女子大学 文教育学部教授

1973年九州大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。1968年、71年、テキサス大学大学院人類学研究科へ留学。その後、佐賀大学教養部助教授、九州芸術工科大学芸術工学部助教授・教授を経て、1998年より現職。

主な著書に『病氣と治療の文化人類学』

『ケガレの構造』『医療人類学入門』

『生きる力をさがす旅 子と世界の文化人類学』他多数。

水はその物理的な力によって物を溶かし、洗い流し、形状を変えることができる。このため、水が生命維持のために不可欠なものであるからだけではなく、水に多様な象徴的な意味を与えてきた。水はある状況を劇的に根本的に変える力を持ち、そのひとつがきたないものをきれいにし、さらには清める力を持つという象徴的な力への認識である。

水が汚れを取り除くことができるのは、その物理的な力によるものであるが、象徴的な意味においては、汚れは泥や糞尿のようなものを指すというよりも罪や不運や災いや気分が悪いといった、形のないもの、それ自体象徴的なものを指す。従って、水そのものの物理的な力も水そのものの象徴的な清める力を減じることはない。雨量が多く傾斜地の多い日本では、神道や修験道において聖地とされる場における水は物理的にも極めて清浄であり、その清浄さゆえに信仰の対象となっているかと考えられ

がちである。そうしたことに慣れた日本人にとって、ガンジス川の下流の聖地の水の物理的な力もなさはひどく気になるところであり、ごみが浮かび濁った水の中に身体を浸し口を濡らさず、教徒の姿は異様なものとみなされがちである。しかし、象徴的な意味においては、清冽な滝の水の下で修行する修験道の信者の行為と変わることなく、水は同じようにきたなさを清め、罪や不運を取り除く力を持つと信じられている。

近代化に伴って成立し、一般の人々の間にも浸透していった「衛生」の観念は、伝染病の予防という大きな社会的な目的のために、水の管理に目が向けられた。特に日本では、開国と近代国家の成立がコレラのパンデミック（世界規模でのコレラの大流行）と時期的に重なったために、物理的なきれいな水を確保することは、水質検査が十分にできなかった明治初期には飲料水として衛生上適当か否かの指標とされやすかった。裏日本

のある漁村の場合、共同井戸から飲料水を得ていたために、井戸の周辺の管理について役場から度々指導や注意が住民に対して行われていたことが、役場に残されていた資料から明らかになってくる。また、軍隊が演習のための行軍中の宿营地からこの漁村がはずされ、他の地域に兵隊は分宿することになったが、その理由として衛生上良質な水が得られないためとされており、水質と病氣予防との関係に行政側が神経質になっていた状況がよくわかる。

それでは、物理的な水のきれいなさは、象徴的な水の力である「清める」という意味にすっきり取って替えられたのか、あるいは物理的な水のきれいなさは、常にそして徹底的に追及されているのかというと、必ずしもそうではない。水道の普及は、水源から蛇口まで硬い管の中を数百キロ、時には数千キロも水を流し、しかも汚泥や動物などが混入しない仕掛けを作り上げた。常に飲料水として適性を保つよう消毒されてい

る。しかし、自らの口に入れる水はともかく、自らが使った水はどこへどのように流れて行き、その果てはどのようなのかという想像力を私達から奪っている。例えば、琵琶湖の水がもっとも良い例であり、周辺から流れ込んだ水を浄化して飲料水としているが、「衛生上」どんなに飲料水として適性であったとしても、それを飲む京阪の人々はその水がつかつてどのように使われたのかということに無関心ではられない。現在、「の水」という銘柄水が大量に買われているが、それは、象徴的なきれいな水を求めていると考えざるを得ない。

ガンジス川の例をとると、私達は象徴的な水の力への信仰を侮りがちになるが、象徴的な思考やイメージは、ヒマラヤ山脈に降る雪と下流の水とをつなげる思考をインドの人々の間に育んできた。一方、目先だけの衛生思考は「水の星」の地球を徹底して汚染しようとしている。



特集「洗つを洗つ」

水とキヨメ きれいときたない 波平恵美子 2

涙はなぜ美しいのか 風土、宗教、文明から見る水の浄化力と浄めの文化 山折哲雄 4

風呂はハレ空間だった 現代の入浴スタイルはいつから始まったのだろう 大場 修 12

土地の文化を知らない洗濯機は作れない 洗濯機の商品開発と消費者のライフスタイル 寺田 實 18

白もの信仰と清潔な香り 技術者が語る洗剤の戦後文化史 藤井徹也 22

清潔感を洗う 編集部 26

シャボンの香り 松本 葉 30

水の文化発想実践取材 水環境ネット東北 おとなが楽しまないと子どもに伝わらない 32

水の文化書誌 雨乞い 古賀邦雄 40

インフォメーション 42

洗あらうを洗あらう

ものを洗つとき

なにをもって「きれいになった」と思うのでしょうか。

「洗つ」の歴史をたどってみよう。

わたしたちの持っている清潔感の誕生は

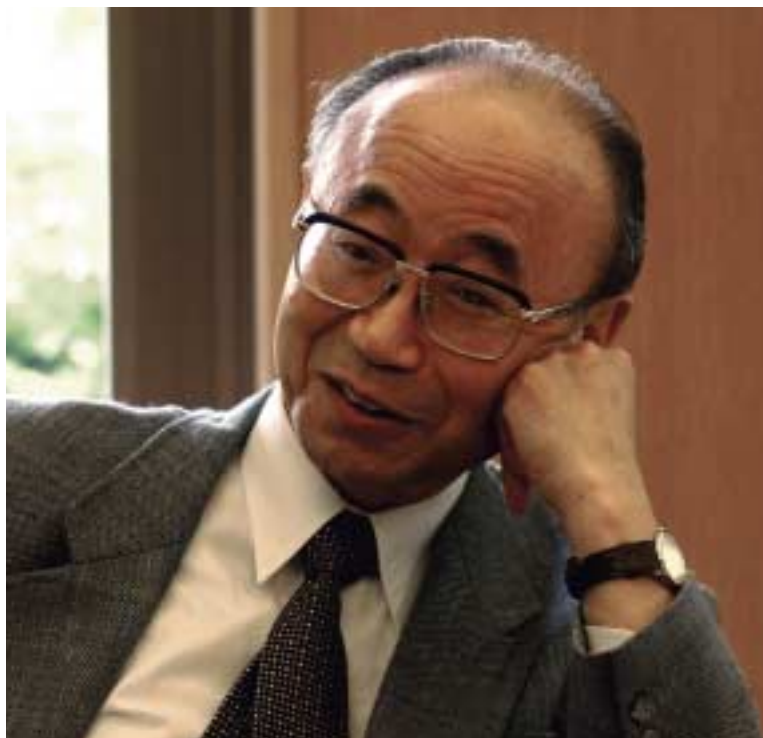
意外と新しいことに気づかされます。

服を洗う、食器を洗う、身体を洗う、心を洗う。

清潔と感ずる源はどこにあるのか。

どのようにわたしたちの暮らしを変えてきたのか。

「きれいさ」「常識を」「洗つ」という行為をとおして解剖してみました。



洗あらうを洗あらう

涙はなぜ美しいのか

風土、宗教、文明から見る水の浄化力と浄めの文化

山折哲雄

国際日本文化研究センター所長

1931年生まれ。東北大学印度哲学科卒業、同
大学大学院博士課程単位取得退学。東北大学文学
部助教授、国立歴史民俗博物館教授、国際日本文
化研究センター教授、白鳳女子短期大学学長を経
て、現在国際日本文化研究センター所長。
著書に『日本仏教思想論序説』『日本人の霊魂感』
『死の民俗学』『日本宗教文化の構造と祖型』
『近代日本人の美意識』『愛欲の精神史』
『鎮守の森は泣いている』等多数。

まず、「自身の「水」との関わりについてうかがえますか。

私は小学校六年生の時、岩手県の花巻に住んでいました。北上川が流れていました。夏になるとよく泳ぎにいったものです。その場所は、ちょうど支流が合流する所で、流れと水温が変わる場所だった。どういっわけか、そこがわれわれ子どもたちの遊び場だったのですが、そこで、私はおぼれたことがあります。半分泳ぎを覚え始めたばかりのときに、深みにはまって足が立たない。そのときの恐怖感というのは凄いものです。いまだに、ふと思えば浮かべることがある。ただ、不思議なことに、翌日、きちんと泳ぎを覚えていましたね。おぼれるということは、私にとっては、水に馴れるために必要だったわけです。それ以来、「あの恐怖感は一切何だったのだろう」とずっと思っていました。

後年、私が翻訳をした『魂の航海術』という本を書いたスタニスラフ・グロフという心理学者が、「子どもが誕生する時にわざわざ「歓喜の叫びをあげる」という解説がなされているが、それは違う。あれは恐怖の叫びだ」と書いています。誕生の本当の秘密は、水の中に、つまり母親の羊水の中に生活していた赤ん坊が、この世に現れて初めて空気呼吸をする。その中間、闇のトンネルをくぐっていく。それは狭い所を通っていくのですから、それだけでも大変な肉体的苦痛です。まったく別の世界に出てくるわけで、恐怖の体験、つまり人間の恐怖の原型的な体験だろうということです。グ

ロフの発言を知って、私ははっとしました。ああ、誕生というのは恐怖なのだ。水の生活から陸の生活に人類は進化してきた。それを、わずか数ヶ月で体験すること、私が子どもの頃におぼれた体験がスーと結びつきましてね。これが私の水に対する原初的なイメージです。

恐怖の体験の磁場という記憶をわれわれは持っていたはず。それが今、文明が

進み、自然災害が起こる時、例えば鉄砲水が山を崩し、家を崩し、人を崩す。その時に、あの恐怖感が必ず蘇る。水というのは怖い存在ですね。

身体の垢と心の垢

私は大学時代にインド哲学を専攻しており、インドにはずいぶん行きましました。イ



ベナレス、ガンジス川の水で沐浴する人々

ンドで一番感動するのはベナレスという所です。人口150万人の都市で、真中にガンジス川が流れている。川の途中に火葬場があり、骨灰を目の前のガンジス川に流すわけです。ほとんどのヒンズー教徒はガンジスの水の浄化力によって魂が昇天すると信じていますから、墓は作りません。魂の行方だけが大事なのです。

ところが、魂を昇天させるほどの浄化力をもったガンジス川が、見ると、ものすごく濁って、汚くて、日本人の感覚でいうととても清浄の川とは思えない。そばで大小便をしている者もいるし、洗濯をしている者もいる。歯を磨いている者もいる。中流にいれば動物の死体も流れてくるし、それをついばむ禿げ鷹がいたり、とても、きれいというわけにはいかない。

けれどもインド人にとって、外面的な水の形態というのは、本質的なものではないのです。むしろ水の持っている内面的なものへのイメージションが、われわれと全然違います。日本人の水に対する単純な信仰と対極にある水感覚、それを知らなければ、水の心まで語ることはできませんね。

ベナレスのすぐ近くに、お釈迦様が説法をしたという王舎城の近くの「靈鷲山」という所があります。法華経に出てくる山の名前で、五山ある中で最も中心的な山で、この峯でお釈迦様は法華経を説かれたという聖地です。その麓に温泉があります。かつてお釈迦様とその温泉に入ったといわれている所です。ある時期からヒンズー教徒が管理していますが。

土地の知っている人から「温泉に入っ

いい」と言われて、私は出かけて行きまし
た。温泉から出てくる人を見ると、皮膚病
にかかったような人もいます。どうしよ
うかと迷ったけれど、「ここは入らねばなるま
い」と覚悟を決めて入りましたよ。階段を
20段ほど降りて、裸になって手拭いと石鹸
を持っていきましたら、止められました。

「下着だけ着ける」と。男女混浴ですし、
われわれの温泉感覚と全然違います。

入ると、10人くらいいましたが、みんな
じっとしている。ちょっと不気味でした。
でも、お湯そのものはとてもすばりしかつ
た。細かな砂がしてあり、それが素足に
当たる感覚が心地よかった。なぜ、みんな
じっとしているのだろうと思いました。石
鹸は持つてはいけないから、誰もからだを
洗わない。しばらくすると、一人上がり、
二人上がり、していく。上がっていく人を
観察していると、湯壺の周辺に祀られた神
像を拝みながら出ていく。入ってくる人も
拝みながら入ってくる。その時にハッと思
ったのは、「温泉というのはヒンズー教徒
にとつて、身体の垢を落とすのではなく心
の垢を落とす所」だということでした。

そういうえば、ヒンズー教の寺院に行く
と必ず水場があって、その水で身体を浄めて
神殿に上がります。その水も汚物が混じっ
た様な泥水のような水です。私は、そうい
うものだと思っていたのですが、温泉場の
体験で、彼らにとつて水というものは、本
質的に水の内部にある見えない浄化力を指
し、われわれが考えるようなきれいな清冽
な水という感覚とはまったく違つたわけ
です。いくら清潔な水であっても、その水の内

に本当の浄化力があるかないかというの
はまた別の問題なんですね。ですから、ヒ
ンズー教徒は身体を石鹸で洗うときは、地
上の井戸や水道の水で洗っています。

水への信仰

考えると、日本もかつてはそうだったの
がもしもありません。例えば熊野本宮に行きま
すと、湯の峰温泉という硫黄泉があります。
昔は熊野詣でをする人が全国から巡礼して
きて、「蟻の熊野詣で」というほどの賑わい
でした。そういう人々は、やって来ると本
宮にお参りする前に、必ず湯ノ峰の水で身
体を浄めてから参詣したのでした。それは、
熊野川の水で浄めるのと同じ効果がありま
した。確かに熊野川の水はきれいです。そ
れに比べると湯ノ峰温泉は硫黄泉ですが、
むしろ混濁している。けれど、やはり温泉
の持つている「浄める」という浄化力に対
する信仰というものがあつたと思えますね。
それは、王舎城で、かつて釈迦が入つたと
言われる温泉で、ヒンズー教徒が日々信仰
の生活を送っている世界とつながっている
のではないのでしょうか。

同じようなことを言いますと、山形県に
出羽三山があります。羽黒山、月山、湯殿
山。奥の院が湯殿山で、その山頂に大きな
岩があります。これは女性の陰部を象徴し
ていまして、山の女神と考えてもいいです
ね。この大きな石の下から熱泉が吹き出し
ていて、そこにお参りする人は、履き物を
脱いでその熱泉に足を浸して浄めの儀式を
行います。現在、そこに行きますとね、

「入ると水虫が治る」と書いてある(笑)。
これはその人の全身全霊を浄める聖なる水
なわけです。なのに、「水虫が治る」とある。
でも、水に対する信仰という点から見ます
と、こういう変化もおもしろいわけです。

そのような目を持って、日本全国の霊場
を訪ねてみますと、そばに必ず泉があり、
温泉が出ています。修験道の聖地も同様です。
行者が修行して身を浄めるのです。

私はそういう信仰というのは普遍的なも
のだと思っています。それで思い出すのは、
フランスのルルドの泉のことです。今から
130年前に、ある少女が病気になるた。
近くに岩場があり、そこにマリアが降臨し
て、その少女に託言をするわけです。「近
くに泉が湧いているから、そこに行って水
を飲むと病気は治る」。その通りその場所
に行き、水に身体を浸し水を飲むと、病気
が治つた。その話が近隣に広がつていき、
ヨーロッパ全域に広がり、今やヨーロッ
パ最大の聖地です。年間四百数十万人がや
つて来るそうです。

それはピレネー山脈の麓にあります。私
は20数年前に行きました。そこに参りま
すと、ルルドの奇跡を記念して岩の上に大
きな教会が建っています。洞穴の中に等身
大のマリア像があり、蝋燭が林立している。
その側に露天のバスルームが10基ほどあり、
非常に浅く、身体が不自由な方も楽に入る
ことができる浴槽が据えてありました。蛇
口をひねると泉が出てくる。それに触れて
病気が治るなど、奇跡が現実起こつてい
るのです。その側の壁にもたくさん蛇口
がついていて、みんな大きなペットボトル

に水を入れて、5本も10本もかついでいく。
側には近代的な病院があるし、また神父さ
ん達が毎週やって来るカウンセリングルー
ムもある。水による信仰治療と現代的な医
療。そしてカウンセリング。ルルドは、こ
の3つが総合された聖地なのです。その中
心にあるのが「水」ですね。

ルルドの泉は確かにきれいですけれど、
生理的に、衛生的にきれいというだけでは
ありません。やはりその霊地の奇跡にゆか
りのある、水の内面の浄化力に対する信仰
が基本です。その点では、ヒンズー教徒も
キリスト教徒も同様で、本来は日本もそう
だつたと思います。

日本は風土が森に恵まれ、山に覆われ、
豊かな水、清冽な水に昔から恵まれていた。
楔くわぎの水もそうです。本来はやはり水の内
面的な浄化力に対する信仰だつた。それが、
だんだんと薄れていきます。それは日本だ
けではなく、海外でもそうでしょう。飲み
水としては、清潔で衛生的な水のほうがあ
りがたいからです。

カルカタに行った時に、ホテルの冷蔵
庫を開けるとミネラルウォーターが入つて
いる。「お、これはインドのミネラルウォ
ーターか」と思い、ラベルを見ると、ガン
ジス川の水と書いてある(笑)。ただ、よ
く読むと、それはガンジス川の源流の水。
ガンジス川だつて源流はきれいなわけでは
ないが、文明が進むにしたがつて水が汚れ
るのことに、われわれは徐々に慣れていくわ
けです。しかし、かつての源流の清冽さに
対する信仰というのがやはりベースにあつ



上：少女シュペリウールにマリアが現れ、奇跡を起こしたという泉が湧く洞窟。
左：ルルドの泉は沐浴所以外にも、水を汲むことができる場所にも引かれている。参道に並んだ土産物屋には、ポリタンクが売られており、順番を待って各自で水を汲み、持ち帰る様子が見られる。(写真提供：JTBフォト)
右：熱心な参拝者によって捧げられた、120cmもの口ソクが林立する。



て、いくら汚くなくてもその信仰が生き続けている。現在のヒンズー教徒が持ち続けているのは、その信仰です。そこがおもしろい。

インドに比べると、かつて日本人が持っていた水の内面性に対する信仰というものは、文明が発達するにしたがって、かなり衰えていますね。

「きれいな水」と 「浄化力のある水」

「水の清潔さ」と「水の内面的な浄化力」は同じではないということですね。

同じではない部分もある、ということですよ。日本の場合にはそれが一体化しているでしょうけれど、ペナレスでは火葬場を取り巻くようにして、バザールが迷路のようにして作られているのですが、そこを歩いているときにガンジス川の水を売っている所がありました。ガンジス川の水を缶詰にして売っていて、1缶が1ルピーです。私はそれを買って日本に持って帰ってきました。私はそれを開けて科学分析をして、いかにガンジス川の水は汚いかということを証明しようと思った(笑)。今から30年前の話ですけれど、本当に神をも恐れぬ仕事です。でも、ついに私はその缶を開けることができなかつた。そのままにして、今も残っています。聖なる水という観念がどこかにあったのです。開けて分析すれば、それが衛生的に良い水とは言えないという結果が出るに決まっているわけで、そんなことは

分かっている。でも、そんなばかなことをするよりも、缶を振るとタプタプと音がして、それを聞くとガンジス川の永遠の音を聞いた気分になりましたね。そういう体験があります。

ヒンズー教徒は、これを買って、自分の家に祀っている神像に振りかける。あるいは自分の身体に振りかける。これは浄めのためです。場合によっては飲んだり、近所の人に分けたりします。そういう多面的な働きをするのが、缶詰に入ったガンジス川の水です。それはルルドの水と同じですね。

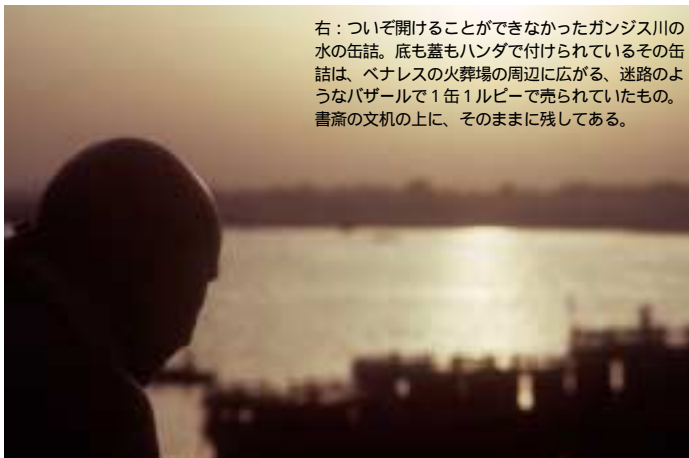
それは、仏教、あるいは神道でも同じですか。

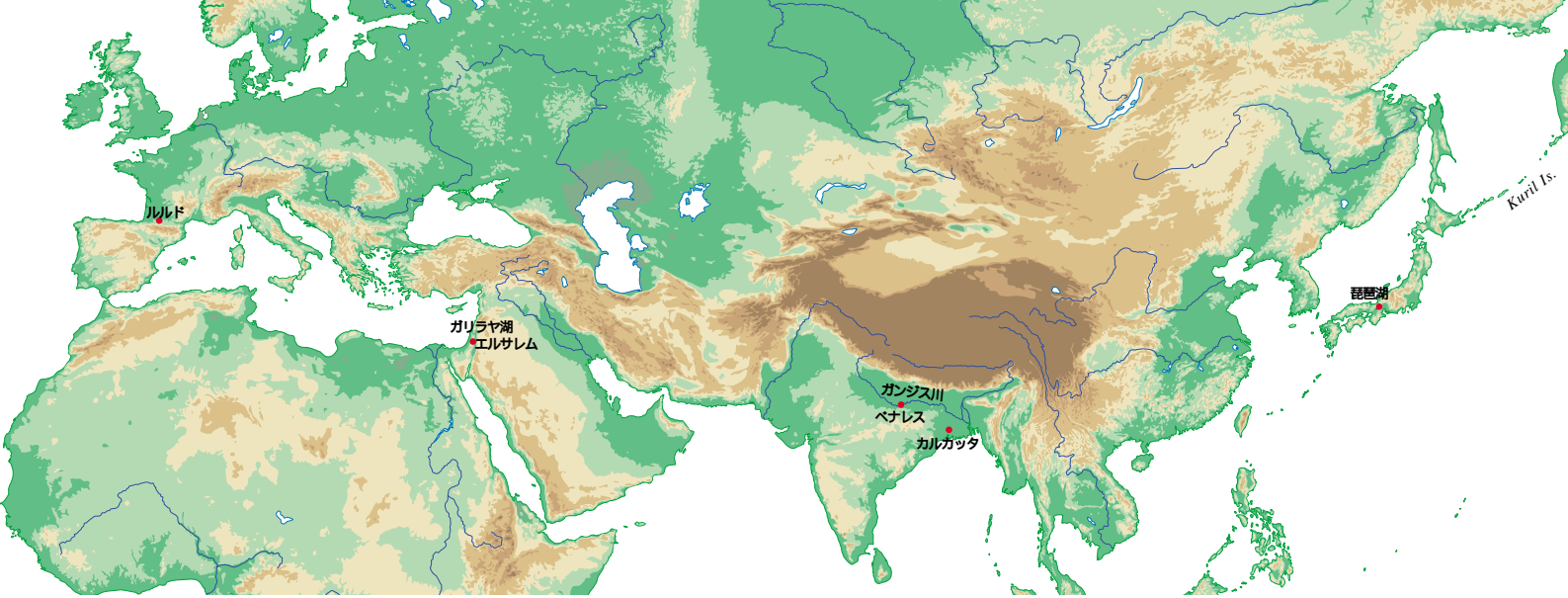
同じだと思いますね。ですから、水に対する信仰というのは、もともと普遍的なものなのです。人類が発生した時に、そういう感覚というか信仰というものがあつた。何も日本だけのものではない。

生命を維持するのに、もっとも大事なのが水です。われわれの体内を維持するものほとんどは水です。そういう点で、原初的というか本能的なものです。食物に先だって大事なものは水ですよ。断食しても人間生きつづけることができますが、断水の段階で初めて死ぬわけです。

ですから、例えば、二月になると東大寺の二月堂で行われるお水取り。あれはよく若水のお祭りというけれど、どうも水に対する感覚がそれだけでは浅いような気がします。もう少し、水の持つ本質的な力を考えることが必要だと思いますね。

右：ついぞ開けることができなかつたガンジス川の水の缶詰。底も蓋もハンダで付けられているその缶詰は、ペナレスの火葬場の周辺に広がる、迷路のようなバザールで1缶1ルピーで売られていたもの。書斎の文机の上に、そのままに残してある。





水は信仰の有様を左右する

私は、1995年にイスラエルに行きました。テルアビブからナザレに行きまして、イエスの歩いた道を巡ってみようと思っただけです。見ると、砂漠の中のとことろに家が建っているという感じなのです。水が決定的に乏しいという印象でした。水の極端に乏しい所でイエスは生活し、キリスト教あるいはユダヤ教のものが形成されていった。

東の方に行くとガリラヤ湖がある。これは美しい泉です。水そのものは豊かな感じですが、その周辺は全部砂漠。これが琵琶湖とまるで違う所です。しかし琵琶湖の琵琶と同じように、ガリラヤ湖のガリラヤは琵琶という意味です。形が似ているということで、両湖が対比されるわけですが、実際にガリラヤ湖に行くと、湖底から琵琶の音が聞こえてくるような気になりました。かつて琵琶湖を見た人は、形が琵琶に似ているということだけでなく、琵琶湖を見て湖底から琵琶の音を聞いていたと思いますよ。平家物語に描かれているように、源平合戦で多くの人がそこで死んでいる。平家の語りや琵琶の音を聞くと、湖底から人の声や琵琶の音が聞こえたと思う。同じ事がガリラヤ湖でもあったのではないだろうか。

イエスはそこで盲目の人や、らい病にかかった人を治すわけですね。しかし、それにしても周辺は砂漠。水の欠乏は疑いようがない。それからイエスが洗礼を受けたと

いうヨルダン川が流れ下っていますが、これはちよるちよるした流れの川です。とても大河というものではない。兩岸はずっと砂漠で、そのまま南下していくとエルサレムに入る。このエルサレムも「聖地」という感じよりは、むしろ廃墟の上に建てられた都市のように感じました。なぜそう感じるかというと、水がないからです。やはり古代ユダヤ教やキリスト教というのは、水との戦いの中で形成されたわけで、今でもそうです。

こういう水が欠乏している風土、つまり砂漠に生きる人々にとって、唯一価値のある源泉は地上にはない。地上には何も無い砂漠だからこそ、天上の彼方に唯一の絶対価値を求めるようになる。一神教の風土的背景というのは、まさにここにあると思います。これは理屈ではありません。行ってみたら実感として分かります。水の有無とというのは、そこに住んでいる人間の信仰から死生観、自然観から美意識まで、何から何まで方向づけている決定的なものです。水は人類の文化や文明のもつとも根底に横たわっているものではないか。このことが、私はイスラエルに行って初めて分かりました。

日本に戻りますと、山あり森あり樹木あり、水ありで、しかも川は美しい。周辺は海。何も天上の彼方に絶対的な神を見いだす必要がないわけです。神は地上にいるのですから、山や森に入っていくとその中で神の声を聞いたり仏の声を感じたりできます。自然そのものに人の気配を感じますね。森は豊かで、森を貫いて流れている水があ



砂漠の中の街エルサレム

る。そこから山の幸、海の幸、水の幸をいくらでも手に入れることができます。つまり、地上のあらゆるものに命が宿っているという多神教的世界が広がっています。そして中心になっているのが水です。森があったり山があっても、水が涸れるとその森や山は荒れてしまふ。

骨太な思想が生まれるには

仏陀が伝道した地域は、今のインドとネパールの境で半砂漠地帯。ものすごく乾燥している地帯です。仏陀が伝道を行ったのは、地球が急速に砂漠化している時代だったのではないかと、水が欠乏している、そういう状況の中で仏陀の思想が生み出されたのではないかと想像しています。

そのように見ると、イエスもそうです。聖書を見ますと40日の間、夜も昼もなく何も食べずに砂漠をさまよい歩いている。イエスも飢餓の状況に自身を置き、砂漠の中で、人類救済の宗教を生み出した。

マホメットも砂漠の中で伝道活動をしています。水が極度に欠乏する中で、イスラーム教という砂漠の宗教が、まず成立したのだといっています。

今から2千年〜2千5百年前、人類を救済するための優れた思想・宗教というもの、砂漠化している風土の中から生まれたのです。

ちなみにインドについてですが、インドは精神の輸出国だということがわかります。仏陀からガンジー、そしてマザー・テレサ、マザー・テレサはヨーロッパ人ですが、イ

ンドが彼女を惹きつけた。そのマザー・テレサを媒介にして、多くのインド的精神が世界に輸出されていった。これはやはりインドの凄いところですね。

砂漠化の問題にもどって言えば、中国もそうです。日本はその中国文明から圧倒的な影響を受けていますが、その北方中国は乾燥地帯です。

そういうことを、最近の環境論者は忘れていないかと思えます。日本は水や森が豊かにありますが、そういう森と水の風土からは、歴史的に言えば真に創造的な人類を救うような骨のある思想は出てこなかった。ですから日本は、いつまでたってもモノの輸出しかできない。この豊かな飽食に慣れきった日本というのは、本当の意味で豊かになれないのではないかと、もっと砂漠化が進んで、その困難を引き受けるような生き方をしなければ、いつまでたっても甘い環境論の域を出られないのではないかと思っています。

すると、一木一草に神が宿っているという多神教的世界というのは、どう捉えればよいのですか。

これはこれで、意味のある、価値のある思想体系だと私は言ってきました。そこに日本の文化の大きな可能性があると思います。しかし、環境の問題からすると、もう一歩、深く考えておかななくてはならないだろうと思います。

レスター・ブラウンが言っているように、中国はあと20〜30年もすると、穀物の輸入国に転じるでしょう。インド〜アフリカにかけて、飢餓ベルト地帯がさらに広がり、人口が爆発的に増大し、そこから難民が流出しはじめる。急激な経済成長で中国の大気汚染はひどいものになる。そういう影響を日本も受けざるをえない。その時に「開発をやめろ」とは、倫理的にも言えません。いずれわれわれも、そういう飢餓ベルト地帯で大気汚染を始め人口爆発、食料危機の

中で生きていく人々と一緒に共存していかざるをえなくなります。何十年後になるかわかりませんが、その時にわれわれにもやはり飢餓が襲ってくるのです。私は究極の環境問題は飢餓問題と思っています。

万物に命あり

日本的な多神教的世界をアミニズムとよく言いますが、私はその言葉が嫌いで、「万物に命あり」という意味で、これを「万物生命教」と呼んでいます。この万物生命教を一番根づこのところで支えているのが水です。世界の各地どこへ行っても、この水をどう確保するかという問題に人類は直面しているといってもいいくらいです。そのためには、やはり「万物に命あり」という信仰を通して、当の環境や自然を維持していくしか手がないわけです。

万物生命教を復権するには、水の浄化力について考える必要がありますね。

そうですね。日々飲料水のため、生活用水のため、産業用水のための水、と使っていたのでは、水は単に使い捨ての存在にしかなりません。それを循環させたり、再利用したり、大事に使ったりするためには、水のもつ根元的な価値に対する信仰という確信がないと、うまくいかないですね。万物生命教はまさにそのことを言っているわけです。

樹木だって、水をたたえて初めて樹木になるわけです。万物生命教の根本にあるの





は、水であり、水に対する信仰ですね。これは縄文以来変わることがなかった。それですでに1万年の歴史がある。縄文文化という、荒唐無稽なことを言っているという人も多いけれども、中国文明の影響を受けている日本の歴史はせいぜい1500年です。その中国文明の後に、1500年ほどの西洋文明の時代がくる。西洋文明、中国文明の根底に縄文文明が横たわっていると考えたほうがいい。この立体構造の中でわれわれの文化を、われわれ自身で考えなくてはならない。縄文文明がもつとも豊かに持っていたものは何か。その一つが、水への思いだったと思います。

水の根元的な価値

どうも最近の動きを見ると、水の根元的な力を求めるのとは別に、清潔な

水を求める動きもあります。この二つは別の精神の動きですね。

私もペットボトルのミネラルウォーターを飲んでいますが、ミネラルウォーターを求めるのは美味しい、清潔な、衛生的な水を飲みたいという願望ですね。

実際に山肌に噴き出ている熱泉というのは、やはり浄化力の強度が違うんですね。やはり温泉は入るまでは「汚らしい」と思っていたけれど、入ってみたら、実に素晴らしいお湯だった。そういう思わぬ発見もあるんです。

水の根元的な価値をもう一度発見して、みんなのものにするためにはどうしたらよいでしょうか。わたしたちは、そのことを一度忘れてしまっているわけですね。

一度、僕みたいに溺れないといけないね(笑)。地震が起こったり、大洪水が起こったりしたときに、はじめて人間は自然の恐ろしさを知るわけです。比喩的に言いますと、近代化とか産業化というのは、「火」に基づいてつくられた生活のパターンでした。それに対して、それ以前の時代というのは「水」のさまざまなシステムに基づいた長い歴史であったといっています。今、われわれは火の文明という立場から水の文明のあり方を見直すべき時にきているのかもしれないとは思っています。

神道は、そのような思想を意識的に取り入れているわけですか。

われわれの神道の伝統は、そのような可能性を持っていると思います。今から一万年以上に遡れば、キリスト教も仏教も存

在していない。「万物に命あり」という原始神道的な信仰だけが存在していたはずですが。これは地球上どこに行ってもそうです。これは地球です。一番普遍的な宗教というのは、まさにそういうものです。

ただ、現代の日本人がイメージする神道のいけない点は、国家と結びついてしまうこと。国家と結びついた時に、原始神道的な感覚は墮落してしまふ。そういう危険性弱さが本来的にあります。ですから、文明の側で、それをよく自覚していないといけない。

「汚れ」と「浄め」の意味

浄めを考えると、汚れの問題を避けて通れないと思います。「ケガレたものをきれいにする」という意味や「ケガレた状態、つまり日常性を回復させる」と

いう意味など、いろいろな解釈があると思いますが、汚れと水の関係についてはどのように考えられますか。

「もの、みな、衰える」という考え方がありますね。たとえば日本のお祭りもそういう、ものみな衰えるとき、すなわち秋から冬にかけて行われる場合が多い。村祭りというのも、ふつうは秋の収穫が終わった後に行われるものですね。

秋から冬にかけてというのは、太陽が衰える時期です。それは人間の生命が衰える季節ということでもある。生命が衰えるということは「もの、みな、枯れる」ということです。樹木にしてもそうです。そして、水も涸れる。それを新しくするために春になつて年が明けて、水を新しくしなければならぬ。そのための儀礼が要求される。若水信仰などはまさにそうです。「ものみな枯れる」ということと、水が汚くなる、水の力が失われるというのは、全部太陽の運行と結びついている。そこから、汚れというのも「日常性が枯れることだ」と、民俗学の世界では言われるようになっていくわけです。

ただ、それよりも、もっと大事なことは、歴史的にみると原始神道というのは、地上にある汚れたものをサツと洗い流すことができるという感覚を持っていたことです。禊ぎはまさにその象徴。身体にサツと水をかければ、汚れが消えて汚物が洗い流されるという感覚です。それが一種の清浄感、清潔感と繋がっていた。そもそも自然が美しく水が清冽ですから、ちょっとしたでも汚

たものはすぐ目立って意識されるわけですから、水で洗い流すことになる。

しかしその原始神道の世界では、内面のいやらしいもの、内面の汚れたもの、罪、悪、そういうものを洗い流すという風には決まっていなかった。もともと縄文人は、内面的な罪、悪という感覚を強くは持っていなかったと思います。ここが問題なわけですね。「人間は本来罪深い存在である」という思想をもたらししたのは仏教です。仏教は内面的な罪、汚れを問題にした。それが、人間には清らかな人間と、不浄な人間がいるという差別感を持ち込むことになった。その仏教が、それまでの原始神道と習合していくわけです。原始神道にも水によって人を浄めるという信仰があったのですが、それが日本に入ってきた仏教と結びついて、内面化するわけです。そこで、はたしてその内面的な罪は、水の力によって浄められるのだろうかという問題がでてきました。

その答えは興味深いですね。

そうですね。結局、水だけの力ではどうにもならないという答えになるのでしょうか。懺悔をするとか、修行をするとかしなければ、浄められないということになるのです。それで仏教はさまざまなプラクティス（実践）を要請しているわけです。水だけではどうしても人間の本质を救うことはできない、という思想が根底にあったからでしょう。

にもかかわらず、仏教、特に密教の修行

では、重要な儀式で「香水」というものを用います。香水を身体にふりかけて、悪霊を祓う。悪霊というのは内面的な汚れを意味している。ところが、香水というのは、水に何か香を混ぜているわけでもない単なる水なのです。水のことを「香水」というのは、水の中に特殊な力があると見ているからです。そこに原始神道の影響があるかもしれない。悪霊や怨霊という内面的な汚れを、加持祈祷で祓うというシステムがこうしてできあがる。加持祈祷では、水をかけることが大切です。それは、民間芸能でも同じでして、湯立ての行事というのがあって悪気を祓う。そういうことが微妙に絡み合っていて、霊水信仰の背景が見え隠れしています。

とはいっても神道的な被い浄めと、仏教的な加持祈祷の被い浄めというのは本来異なるものでした。神道では外面的な汚れを祓う。それは禊ぎの考え方で、記紀神話に出てくるイザナギの尊が、死んだ奥さんのイザナミの尊の所に行つて帰ってくる。それはもう、他界に行つたから身体中汚れに満たされている。だから、川で禊ぎをするわけですね。仏教では人間にはもう少し罪深い業があり、そういうものを洗い流さなければならぬということと、水を使つた被いをするけれど、それだけでは済まない。やはり、仏教僧が関与するのです。

涙に目を向ける

最後に、汚れのもう一つの側面、汚物について言いますと、汚物の典型は大便でし

よう。大便というのは、排泄した途端に汚物になる。しかし、その直前は汚物と思っていない。小便もそうです。排泄する直前まで汚物ではない。

なぜでしょう。

この問題に答えるのはなかなか難しい。「文化がそうだから」というのでは、トロジーになって答えになっていない。謎ですね。新陳代謝で排泄されたものは、その途端に汚物になるといふことです。ただ例外がある。涙です。涙という排泄物は、排泄した後汚物にはならない。

なぜでしょう。

これにも、答えることが容易ではない。ある人が「唾液もそうだ」と言いました。でも、唾液というのは口から吐き出されたとたんに汚物に変ずる。それはやはり涙の美しさとは違う。有用な排泄物だけれど、唾として吐けば汚く感じます。ほとんど、涙だけが唯一汚物にならない排泄物。

それはなぜか。

涙は水でしょう。その涙はきわめて人間的なもので、しかも根元的なものに通じているという気がしますね。毎日の生活で涙を流すことなしには生きていけないというそのわれわれ自身の体験に戻らないといかないと思います。そこをきちんと見つめることが、水の根元的な問題に目を向けるという今日的な問題にもつながると思うのです。



風呂はハレ空間だった

風呂の歴史

まず、風呂の歴史について、大きな流れを教えてくださいませんか。

日本は高温多湿で汗をかくし、風呂に対するニーズは古来からありました。自然が豊か、水も豊富という条件も揃ってはいますが、だからといって昔から日常的にたくさんのお湯を使って風呂に入れたわけではありません。

少量の水で効果的に風呂に入ろうと思えば、やはり蒸し風呂になります。風呂の原型は、日本の場合はやはり蒸し風呂です。蒸し風呂のさらに原始的な形は何かとい

うと、柳田国男は『風呂の起源』と題する小論の中で、「風呂」は、もとは「ムロ(室)」だと言っています。例えば、洞窟の中のように非常に閉鎖的な所で火を焚いた石風呂のようなものがルーツとして想定されると言っています。つまり、もともとは自然の一部を利用して、蒸し風呂で汗を落としていくのが風呂の原型であると。

日本の場合は、温泉に浸かるといふことでもあります。温泉の歴史は奈良時代にまで遡り、有馬温泉とか道後温泉とかは歴史も古く、そこにみなが湯治に行く。しかし、この「温泉」と「蒸し風呂」はなかなか交わらずに江戸時代まで独自に発展します。そして、やっと近代・明治時代になり、銭湯の中

で「改良風呂」というものが登場します。この改良風呂では、温泉的な入り方を導入しました。そこで初めて温泉の文化と蒸し風呂の文化が一体となっていくと言っています。よいと思います。湯と風呂の関係を見ても、言葉として「風呂」は残りますが、近代には湯浴みの形になっていきます。

一方、潔斎沐浴というが、身を浄める行為があります。天皇は毎朝湯浴みをされますが、これは蒸し風呂に入るのではなく、湯をとって浴びるわけです。身を浄めるための沐浴と、より広くは蒸し風呂で汗を流し垢を落とすことが同時に並行し、近代に一つの形になる。そして、現在のわれわれの入浴のスタイルがあり、銭湯はその



復元された釜風呂。高さ180cmほど。内部は畳み三畳ほどで、床には石を平たく敷き詰めている。



天然の岩山をくりぬいて作った愛媛県今治市桜井の石風呂。表側はコンクリートで補強されている。今治市産業部観光課提供



大場 修

京都府立大学人間環境学部教授

1955年生まれ。京都府立大学生活科学部住居学科卒業。九州芸術工科大学大学院芸術工学科修了。日本建築中専攻。主な著書に『風呂のはなし』『阪神・淡路大震災と歴史的建造物』（共著）『洛北探訪』（共著）他。

ままた続いているし、家庭風呂はより発達した形で残っている。風呂の変遷は、ごく大きな見取り図として、このような流れになると思います。

1300年前までは、蒸し風呂が普通

鎌倉時代には「湯銭」といいう言葉もありましたから、公衆の浴場のよつなものがあつたことはわかりますね。「八瀬の釜風呂」は伝説的には古く、672年の壬申の乱の時に大海人皇子が傷を癒したという故事があるほどですが、蒸し風呂が実際に、どこまで時代を遡ることができるのかは定かではありません。

蒸し風呂は生木を燃やし、蒸散作用で薬用効果のようなものを期待しています。例えば、愛媛県今治の桜井の石風呂では、海草を敷いて焚かれます。実際の効果の程はよくわかりませんが、一定の薬用効果を念頭に置いた、つまり、温泉と同じ様な入り方をしていくわけです。ですから、2〜3週間、近傍に泊まり込んで1日に何回も入ります。八瀬の釜風呂もそうですし、瀬戸内一帯にある石風呂、岩風呂もそうです。釜風呂、石風呂は、瀬戸内・四国・九州と西日本にかなり広域に

広がっていますね。時代も下り江戸時代1715年に、洛中洛外の風呂屋・湯屋の数が調べられている文書があり、湯屋、風呂、塩風呂、釜風呂と分類されています。釜風呂は八瀬の釜風呂、塩風呂は八瀬の釜風呂を模したものです。塩をまいて、海水と同じ効果を期待しようというものです。どうも姿形も同じようなものらしい。風呂は蒸し風呂のことで、湯屋は真ん中に浴槽があり、そこに入つたかどうかはわかりませんが、そこから取り湯をかけてかけるという形のもので、このように、いろいろなタイプの風呂が市中に多数あり、それが使い分けされていたという事です。

蒸気浴が湯浴みになっていくのは、いつ頃からでしょうか。

銭湯の歴史は入浴史の大きな流れになりますが、銭湯も古くは蒸し風呂です。しかし、大勢の人を入れなければならぬ。そこで、湯船に深さ1尺ほどのお湯を入れ、周囲を閉鎖的に取り囲む。下はお湯に浸かっているが上半身は蒸し風呂状態という、両方の良さをうまくミックスしたものにします。これが、江戸の銭湯で柘榴風呂と呼ばれるものに応用されます。その深さがだんだんと深くなって現

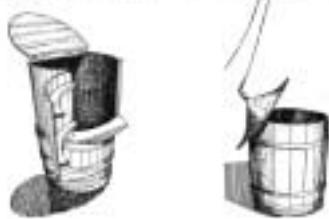
代に至るわけですが、その基本形は蒸し風呂ですよ。

戸棚風呂というものもあり、戸棚のような空間に入り、蓋をしめて蒸気浴をします。ただ、戸棚風呂のように入り口が引き違いでは戸を開けた時に蒸気が逃げってしまうので、多人数の入浴には適しません。そこで、「柘榴口」と呼ぶ入り口を低い所に置き、浴室の蒸気を逃がさないようにした。それが柘榴風呂です。ですから、湯浴みは、やはり近代になってからと考えても、間違いではないでしょうね。

施浴の習慣

鎌倉時代、平重衡によって焼き討ちされた東大寺の復興のために重源上人が大活躍します。現在の南大門などは、この時に建てられたものですが、重源上人は入浴キヤンペーンを行った人物として、日本の入浴史に特筆すべき人物です。中心となつたのは、山口県の大防。この東大寺の荘園から用材を確保するために、重源が自ら現地に行つて職人を集め、木を切り出させ、その職人のための保養として風呂をふるまつたといわれています。やはり蒸し風呂です。

東大寺には施浴を行うための大湯屋が残っています。これは蒸し



上：辻風呂、荷ひ風呂
花吹一男著『江戸入浴百姿』より

下：江戸の湯舟
『廣文庫』十九冊より
金沢兼光編『和漢船用集』明治3年刊に「湯船、武州江戸よりあり、舟より浴室を居え、湯銭を取って浴せしむる風呂屋舟也」とある。

右：写真は伊賀上野忍者屋敷に展示されている「ふごぶろ」別名「飛び込み風呂」。イラストは佐渡の「おろけ」。ともに笠を滑車で吊り上げ下げするが、「おろけ」は下部から熱する方式ではなく、熱湯を注いだ後に入る。

左：滋賀県湖北地方から北陸にかけて見られた木製密閉型の「むぎぶろ」。写真は近江八幡市立歴史民俗博物館の展示。イラストは風土紀の丘資料館より。

上：戸棚風呂の銭湯 客の背中を流す湯女(ゆな)の姿も見え。名古屋城対面所上段の間御殿障子腰張り絵

下：右は戸棚風呂。奥村政信書『日本風俗史講座』第十巻 雄山閣より。左は伊勢路の居風呂。曲亭馬琴著『羈旅漫録』ともに引き違いの戸を持つ。戸棚風呂の半風呂半湯浴方式の出現が、それまでの風呂と湯との区別を不明瞭にする契機となった。

塩風呂
高さ9尺ほどで、八瀬の釜風呂よりやや大きい。焚き方、入り方は釜風呂とほぼ同様である。枯れた松枝を焚いて、その跡に塩水で濡らした草蓆(くさむしろ)を敷く。喜田川季荘著『守貞漫稿』類聚近世風俗志下より。

資料の写真・図版はすべて大塚修著『物語一もの建築史—風呂のはなし』鹿島出版会1986より



東大寺大湯屋の浴室内部 浴室の中央東寄りに唐破風を持つ風呂屋形が据えられている。



東大寺大湯屋の鉄湯船 1197年（建久8年）の銘が刻まれている。



東大寺大湯屋外観 建物は妻入りで西に面し、屋根の前面を入母屋造、後面を切妻造とし、前面一間を吹き放している。湯屋の遺構中最大の規模を持っている。

風呂ではありません。今ある建物はもう少し新しいものですが、中の大きな湯釜は重源上人が1197年に造ったというオリジナルのもので、大変古い釜です。施浴を描いた絵がありますが、釜があつて湯を焚いている。鉄釜があつて、その周りでみんなが身体を洗い、実際に入っている。こついう姿もあることはあるわけですが、数としては多くはありません。こんなにお湯を使えませんから。

施浴は、功德を積むという意味で僧の修行という宗教行為の一環です。近世になると、寺で風呂に入れさせることが活発だったようです。それほど、入浴の機会が少なかったということだったと思います。

京都の妙心寺では明智風呂といつて、明智光秀が死んだ命日に、それを弔うということで風呂をふるまう行事が残っています。こついう施浴の習慣は、各お寺でいろいろな縁日に因んで行われていま

いろいろな風呂

個人の家の風呂を造るときは、スタイルにもいろいろあつて、蒸し風呂的なものもあれば、据え風呂的なものもある。据え風呂といふのは、据え置い

た浴槽に実際にお湯を溜めて、ドボンと入るもの。木桶型の風呂です。鉄砲風呂とかへそ風呂とか、いろいろない方があります。据え風呂は誰が考えたかわかりませんが、かついで持つていくことが可能。いわば移動式銭湯というようなものです。例えば、町の辻に臨時に据え風呂を置いて、そこで金を取って入らせる。そついうのを辻風呂と言います。これを船に乗せると、船風呂。このように据え風呂は大活躍しました。

これと対比されるのが五右衛門風呂で、関西に多いスタイルです。漆喰で周囲を固めるので、保温性は良いのですが、作りつけになります。

近代になると、先ほど申し上げたように、改良風呂が出てきます。改良風呂といふのは、今の銭湯と同じで、浴槽を床に沈めて首まで浸かれるようにした。それまでは柘榴風呂ですから、蒸し風呂の蒸気を外に逃がさないように、閉鎖的に造らなくてはならない必要から、中は真つ暗です。不衛生だし、風紀的にも問題があつて、明治中頃には廃止されました。しかし、地方では相当後まで残ります。明治40年ころまでは残っていたようです。とにかく不衛生といふことで、取り締まりの対象となりました。

農村部では、基本的には蒸し風呂のスタイルです。たとえば、小さなカブセルの桶のようなものに入り、汗を流し垢を取る。「むぎぶる」とか、佐渡では「おろけ」などと言います。垢は底に貯まり、これを肥料として使う。ですから、逆にお湯もなかなか取り替えなかつたでしょう。農業生産の一貫として位置づけられているわけですから。

ただ、こついうことはあまり一般的ではなく、やはり行水程度です。丸竹を置一畳程度並べた「すのこ」があり、そこで、井戸から汲んできた水をかける。それが庶民の風呂です。

風呂はハレの場

庶民にとつては、あらたまつて風呂に入るといふのはハレ向けの行為です。ハレ向けの空間でありたいといふ欲求があります。ですから、銭湯の玄関には唐破風がつきました。

こついう様式は庶民の家にはありません。奢侈禁止の時代ですから、御法度の対象です。こついう分不相応のものは造つてはいけません。銭湯の玄関には、貴族層の建築のスタイルである書院造りの玄関のモチーフが使われました。銭湯には、こついったスタイ

ルがいち早く取り込まれたのです。こつうな今の銭湯と同じイメージになったのは、明治の終わり、大正・昭和になってからで、それまでは、町屋同然の建物でした。ただ、柘榴風呂の場合においても、唐破風にして、下にいろいろな絵を描くような例はありました。他に装飾はないが、柘榴口のみ一点集中して装飾をする。非常に晴れがましく飾り立てる。ですから、風呂に入るといふのは、ハレに対する精神性があり、それが入り口に現れているわけです。そして、これがやがて、銭湯の外観へと発展していきました。

明治以降には洋風の銭湯も出てきて、これは全国的な傾向です。思いっきり飛び抜けて洋風の形、例えば、ローマ風呂的な発想で、ロマネスク的なモチーフで銭湯が造られました。やはり、晴れがましい行為が風呂の建築の発想の原点なのでしょう。

その後、高度成長期を経て、銭湯が一時すたれて、現在はスーパー銭湯のようなものも出てきています。オーソドックスな銭湯は少なくなつてきていますが、やはり、非日常的な空間を求めてきているという意味では、風呂の持っている本来の精神性は、今も形を変えて続いているのではない



右は大黒湯の外観（東京都足立区千住寿町32-6）豪華な総檜造、昭和4年の建築。左は脱衣場。天井のひとつひとつの四角に絵が描き込まれている。



柘榴口 東大寺大湯屋の唐破風の流れを見てとれる。



妙心寺の浴室（明智風呂）の外観 正面に唐破風の庇屋根を配した端正な外観。

でしょうか。

ただ、江戸の銭湯を考えると、「晴れがましさ」と「不衛生さ」が、なぜ同居していたのかという疑問は確かに残ります。日本人は清潔好きで、町にゴミ一つ落ちていないと、江戸に来た外人が驚いていますね。そういう清潔感覚と銭湯の持っている実質的な不衛生というのは、確かに私はそぐわない感じはしますね。

ハレを表わす建築様式

海外の公衆浴場も、やはりハレの意味合いが強かったのですか。

古代ローマのカラカラ浴場などは、そうでしょうね。また、以前トルコに行って屈強な男3人程に垢をこすってもらいましたが、こもまさにそうですね。空間全体がスチームサウナのような所で寝そべて入ります。日本の銭湯は貴族や武家の格式を表現するための書院造りなのに、トルコの公衆浴場の外観は、宗教建築です。イスラムのモスクのようでした。

ハレの意味合いが、トルコの場合は、宗教建築となつて現れているわけですね。そいつのことです。日本の書院

造りというのは、貴族層、武家層の住宅です。支配される側の住宅は、それとは区別して民家と呼びますでしょう。

民家、例えば、京都の町屋は千年以上の歴史があつて、最初から町屋です。京の町屋的なものは近世に全国の城下町に広がっていく。とにかく、民家は武家の住宅とはまったく違うのです。農家は堅穴住居から出てきたものです。寺社や神社もまた違う。用途と誰が住むかによって、日本の木造建築というのはいくつもの系譜があつて、それらがほとんど交わることなく推移してきました。

それが近世になって、庶民住宅が書院造りの系譜を座敷の中に取り込んでいきます。座敷をハレ化していくときに、書院造りを導入するわけです。それが都市の施設の場合は、銭湯に書院風のものを取り込んでいく。ハレ向けの所によりハイスタイルの書院造りを入れていったのです。

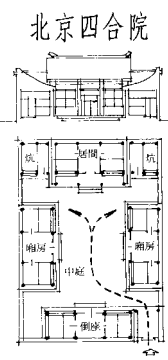
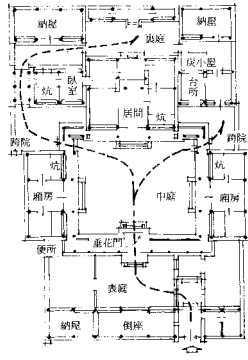
でも、すべての民族でこの方式が用いられたかという点、違う。例えば、韓国や中国に目を向けてみましょう。中国の漢民族の住まひは四合院の形式で、漢民族の農家も都市の住宅もこの形です。いわゆる紫禁城も、基本的には四合院形式です。規模が大きくても、この四合院をつないでいくわけで

す。つまり、庶民の住宅も貴族層の住宅も、形式は基本的に同じなのです。ヨーロッパを見て、そのような例は多いですね。

ところが、日本は、社会の上層と下層の建築様式が違い、なおかつ相互に交流がないまま時を経る。ですから、ハレ向けに自分たちのくらしの世界とは違うものを作るときに、上層から取ってくるということが起こる。一方、四合院の場合はただ裝飾をにぎやかにし、規模を大きくするだけで、住宅の形式としては同じなわけです。

同じ日本人でありながら、異なった様式で、かたやごく一部の支配者層の住宅が寝殿造りから書院造りへと変遷するわけですが、その他の九割以上の人間は堅穴の住宅様式を延々と持ち続

四合院の形式 南北軸を軸線として対象に建物を配置し、玄関を東南隅に配置する。絵で見る中国の伝統民屋。学芸出版社1992より

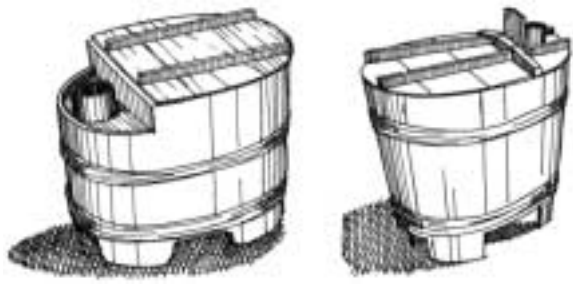


ける。今でも郊外に行くと、いわゆる田舎普請の農家がたくさんありますが、これはまさに民家の系譜の延長線上にある形です。そして、座敷まわりだけが書院造りとなっている。

このように、階層毎の建築様式が相互に交わらないで歴史を辿るということは、世界的にもあまり例がないと思います。ほつたて柱から、礎石建てへと、住宅建築が堅牢になっていく流れもありますが、これも江戸時代の中頃以降の話です。少なくとも室町時代までは確実にそうで、近世前期までは堅穴住居とそれほど変わらない。ですから、庶民の住宅の歴史はそれ以前には遡ることはできません。近世になって、急激に建築的に整っていくのが庶民の住宅です。非常に短い時期に、現在重要な文化財で残っているような巨大な農家ができたため、民家には地域性があり、地域毎の個性があります。しかし、書院造りは個性がない。どこに造っても型が決まっていますから。規模の違いだけが、間取りも決まっています、その形式性が重要なのですから、地域差は少ない。農家も次第に書院造りを取り込んでいきますが、その座敷は東北の農家も九州の農家も、どこへ行



長浜井戸組分布図
 長浜市教育委員会『長浜のまちなみ・北国街道を中心として』1995年より。
 斜線部分が井戸組の範囲。近隣でまとまる町組とは分布が異なる。



鉄砲風呂 右：愛知県大府立民族資料館所蔵
 左：愛媛県砥部物産館所蔵

明治時代の改良風呂
 平出鑑二郎著『東京風俗史』中の巻 原書房より



つても同じですよ。

中国の四合院でハレの様式を持ち込もうとすると、階層の上下があるわけではないので、規模を拡大していきます。2段にも3段にも四合院を連結させ、装飾も手が混んでいく。

日本の場合、確かに、庶民には身分不相応のもの、床の間、書院造りは建ててはいけない、という法度がありました。また梁の長さで建物の規模を規制していました。三間梁と言いますが、梁は3間を超えてはいけないということを江戸時代初頭から徹底させるわけですね。規模とインテリアを規制していったのです。しかし法的な規制はなかったそれ以前でも、書院造りが行われなかったということ

は、庶民層が書院造りを建てるほどの財力を持っていなかったと見るのが正しいでしょう。

ですから、日本の住宅がブレイクスルー、一気に底上げされるのは近世前半ですね。庄屋層が規模の大きな住居を造り、特に関西は本百姓が力を持っていましたので、全体が底上げされて、あまり貧相な住宅はなくなりません。東北の場合、その格差がかなりあり、それが近代まで続きます。

そして、近代といっても明治は江戸の延長ですから。明治末期、大正にかけて、次の発展期に入るわけです。

銭湯が広がる江戸時代前半、そして、日本全国に改良風呂が行き渡るのが明治の終わり頃ですから

その意味では、住宅の発展と風呂公衆浴場の革新は軌を一にしているかもしれません。

一般論では語れぬ

風呂事情

一般に、江戸には銭湯が多いと言われます。内風呂が経済的ではなく、防火の点でも危ないということ、銭湯がたくさん作られたということは、間違いいではないと思います。ただ、地方都市を調べていくと、必ずしも銭湯ばかりに解決を求めるとは言えない例が見られます。

滋賀県の長浜に幕末の史料があり、52町の内、44町分の一軒一軒の間取りがその資料に描かれている

ます。それを全部つないで地図を作りますと、銭湯が見あたらな幕末の長浜には銭湯があまりなかったと考えられます。「近世は銭湯の時代だ」と言っていたわけですが、事実としてはそうとは言いきれない地域があった。これをどう理解したらいいのか。

長浜に限らず、琵琶湖の周辺というのは、意外と水事情が悪い。井戸を掘っても良質な水が出てこない。このため、上水道が江戸時代の早い時期から発達します。かなり深い共同井戸、70〜80メートルもあるようなものを掘って水を汲み上げ、各家々に給水していました。竹の管を道の下に通して会所で枝分けする。台所の脇にはそこから流れてきて溜まった水を

貯える水桶がありました。そして、この1つの井戸から水を利用している家のグループを「井戸組」というのですが、「町組」という既存の自治組織とは違う、もう一つのコミュニティ組織があり、今も現役で生きているわけです。要するに、水事情が悪い、だからこそ共同で井戸を掘って水を確保するという仕組みが近世の早い時期にできたために、内風呂が普及したとも考えられます。内風呂を中心とした入浴習慣が長浜にはあったということ。内風呂の普及率が高い町もあり、近世は必ずしも銭湯文化だけではないのだなとは思いましたね。

水事情が悪い所ほど、水が出にくいので深く掘ります。結果、た

くさんの家に分配することになります。逆に水事情の良い所は、浅い井戸から少数の家に分配する。長浜の中心部は水事情が悪いので、まるでアメリカのように井戸組が広がっています。水は生活の基本で、井戸組がそこを押さえているわけですから、コミュニティの単位としては実態として強かったと思います。水帳があり、1戸あたりの負担金は決まっています。水事情が悪いからこそ、井戸を掘って上水を整備し、その結果として内風呂が発達する。

でも、江戸も神田上水、玉川上水とかなり上水道は整備されています。ただ、人口密集地としての都市部だったので防火のため等もあり、内風呂が流行らなかったのでしょうか。

水の条件が同じでも、そこから生じる「内風呂が銭湯か」という文化的な現象は異なるわけです。水が充分でない所は銭湯が多いという一般論は、必ずしも正解ではないのかも知れません。

風呂の現代化

以降の話です。明治時代の住宅改善のターゲットは水周りで、特にトイレと風呂は不衛生ということに改良の目標になっています。基本的には、不衛生だから母屋から離すということをしなす。それを廊下でつなぐ場合もあります。屋外にポツンとある場合もある。農家などはそうですね。おそらく、風呂の住宅設備としての位置づけが非常に希薄だったのでしょ。風呂というものが、もともと住宅の一設備というよりは、まとまった建物、施設であって自己完結していた。それがなかなか住宅の中に入ってこなかったという歴史があつて、大正時代まできたと考えることができるでしょう。おそらく、明治の人々は母屋と風呂を別立てで考えていくほうが、むしろ自然だったと思います。座敷の脇に風呂を作るといっても、それは、座敷の中に組み入れるということではなくて、座敷に隣接して作るという感覚です。

住宅設備となるのは大正からですが、基本的には五右衛門風呂が住宅の中に入ってくるようになります。五右衛門風呂は保温性に優れているし、防火の面でも良い。どこに行っても古い家の内風呂は五右衛門風呂ですね。この普及は大正から昭和にかけての住宅改善の一環でしょう。洗い場という空間が用意されるのも、この頃になってからです。

温泉の共有と囲い込み

今、温泉ブームですね。ちょうど、私の研究室では各地の温泉をいろいろ調べているのですが、これもなかなか面白い。温泉というのは外湯です。外湯を核に温泉町が発達します。外湯の姿、形などが銭湯と基本的に一緒です。江戸時代の外湯は掘ったて小屋のようなもので、湯治場だから姿形はどうでも良い。それが明治になって御殿化していきます。銭湯の発展とまったく一緒の流れです。今調査している兵庫県の城崎温泉なども、まさに良い例です。書院造りへの憧れが、明治になって自分たちのものとして表現されるようになっていく。そして湯治としての温泉だけではなく、レジャーとしての温泉が登場して、鉄道省などがキャンペーンをはり、各地の温泉をPRするようになります。

城崎温泉や群馬県の草津温泉などは、外湯が現在でもそのままの形で残っています。温泉の株をみんなで持っており、その人々が自前で温泉を運営している。旅館は自前で温泉を持たないで、基本的には外湯に行ってもらう。ところが、静岡伊豆の修善寺温泉では外湯は絶滅しているわけです。今また、新しく復活していますが、基本的に旅館が内風呂を抱えてしまい、入浴客を外に出さない。こういう対称的な温泉町のありようが存在します。

な書院造りの建物を造って、朝5時頃からせつせとみんな入浴する。1つの巨大な外湯を中心にした町ではあります。とはいえ、昨今は内風呂にお湯を引くようになっていきますので、旅館がどんどん肥大化しています。

温泉の権利は基本的に入会権ですね。それを囲い込んでいく所と、共同で発展する所があるわけですか。

そうですね。箱根などは、囲い込み型でしょう。今、こうしていくつかの温泉地を調べ、類型化できればと考えています。外湯は銭湯のようなものです。もちろん、外湯が最初からない温泉場もあると思います。湯治場で温泉を持っていた宿がそのまま旅館化していく、群馬県の四万温泉のようなケースですね。外湯のありようが町の構成を変えていくわけです。

また、この違いは、温泉場での過ごし方を質的に違ったものになります。修善寺などの場合は、大きな旅館の中がパブリックな温泉町として機能して、旅館内ですべてが完結してしまふ。どっちが良いは一概には言えないでしょうけれど、たいへん現代的な温泉のありようとは思いますが。



土地の文化を知らないと 洗濯機は作れない

洗濯機の商品開発と消費者のライフスタイル



上：1900年代のアメリカ製洗濯機
下：上から角型噴流式洗濯機、
国産初の2槽式洗濯機、
全自動洗濯機



昭和28年は電化元年

今日は銀座のギャラリーで画家である寺田さんにお話を伺うわけですが、もう一つの顔でもある洗濯機の商品企画マンとしての経験から、その開発黎明期の話をうかがえますでしょうか。

1962年（昭和37年）の春、1槽式洗濯機の梱包作業をしたのが、私と洗濯機との長いつきあいの始まりです。それから組み立てラインで働き、営業部門に移動、商品企画課に28年間いました。いわば、日本の洗濯機の普及、発展のすべてを見せてもらったというわけです。52歳で退職し、現在は絵を本業にしています。

世界で初めて洗濯機が作られたのは1845年のアメリカで、手動式のハンドルを手に持って左右に揺り動かす方式のものでした。

このかき混ぜる方式（攪拌式）が長らく採用され続けることになりました。50年後の1905年に初めて、電動洗濯機ができました。

日本では1922年（大正11年）に、三井物産がアメリカから電気洗濯機を輸入したのが最初と言われ、国産1号機は1930年（昭和5年）に東芝から発売されましたが、一般家庭への普及には程遠い存在でした。

一般家庭に普及したのは、戦後、1953年（昭和28年）8月に、渦巻き水流を起こしてスピーディーに洗う「噴流式」と呼ばれる洗濯機が発売されたことによります。

これを機に、故大宅壮一氏が「電化元年」と命名した年。冷蔵庫、洗濯機、テレビが三種の神器と呼ばれ、日本の電化生活の幕が開けられました。大卒の初任給が1万円の時代に、1万8500円の角型噴流式の洗濯機は、主婦の家事労働の軽減化が図れることが

ら、人気の商品となったのです。当時は、まだ刃まなめの時代でした。今は、容量をキログラムで表示しているでしょう。それが、刃まなめだったんですから。

続いて1960年（昭和35年）には、日本初の2槽式洗濯機が発売されました。これは「洗い、すすぎ」と「脱水」が同時進行できる商品として、大ヒットしました。1槽式からの買い替えが促進され、1966年（昭和41年）に全自動式が登場するまで、日本の洗濯機の主流となりました。

正確に覚えてはいないのですが、かつて、上野動物園にいた象の花子さんがタライに載っている広告があり、「主婦が1年に洗う汚れものの量は、象1頭洗う労力に匹敵する」ということを訴えるものでした。しかし、私が販売の現場で痛感したのは、洗濯機に対する警戒感がなかなか払拭できないという消費者感覚でした。もうひと

つ足かせになったのは、生地が傷むのではないかと、という不安です。同じような抵抗感は、2槽式から全自動への移行期にも見られ、水をたくさん使うのではないかと、騒音がうるさい、生地が傷む、というようなことを言われました。

結局それらを一つひとつの誤解を解いて受け入れてもらうことでした。一般への普及はありませんが、というのが、現場から見ていた私の実感です。つまり販売拡張のため、消費者の頭の中にある「悪魔」を取り払う役割を担っていたというわけです。

人が参画する要素を 持った家電、洗濯機

洗濯機は、もともと人間が手でしていた作業を機械化したものから、洗濯のプロである主婦層を相手にしなくてはならない。相手は洗濯のプロ。そこが、メーカ



寺田 實

画家

1946年滋賀県大津市生まれ。大津中央高校卒業。三洋電機（株）で洗濯機の商品企画に従事。日本初のホームランドリーの企画やコインランドリー導入を実現、日本電気工業会洗濯機委員会委員長や三洋電機（株）営業企画部長を歴任。1999年に画家として独立、毎日新聞にスケッチ&エッセイを連載。著書多数。

「主導で開発が進められたビデオやテレビとは決定的に違います。」

家事が嫌いな人でも、よく晴れた日に洗濯をして、庭に乾したときの爽快感は感じることでしょ

う。「洗濯」という作業には、一人一人にある種の思い入れがあり、洗濯機にも同様の充足感を満足させることが要求されたということ

です。充足感を満足させるという点では、2槽式のほうが全自動式より優れていたということができ

ます。実際、全自動式のように、使う側の人間が作業にまつたく参画

できないスタイルの洗濯機は、2槽式に比べ普及に時間がかかり

ました。

15年ほど前にシカゴで主婦を30〜40名集めて消費者調査を行いま

した。そこで出された意見を集約して作れば理想の洗濯機ができる

だろうと考えたのです。アメリカで意気込んで発売したのですが、

全然売れませんでした。ユーザーの意見を尊重しすぎると、特長の

ある商品づくりができない。つまり、平均的なものには、消費者は

魅力を感じないのです。

同じことは日本の専門機関の研究にもいえることで、データを鵜

呑みにできません。やはり商品企画は、難しい仕事ですね。常に消

費者の要望と時代背景を察知する先見の明が求められ、設計・技術

営業・企画、デザイン、販売、お客様クレームといった、全社あげての商品開発が、新しい商品の提案へとつながっていきます。消費者のニーズを単に反映させるのではなく、さらにこちらが消費者に

少量の水で洗濯できる機器の開発が急務になり、全自動式で100リットル前後で洗える商品が開発されました。

汚れが軽度になってきた

また洗剤の発達や変化についても気を付けなければなりません。洗濯用の合成洗剤も一昔前までは大箱でしたよね。コンパクト洗剤

当初は利便性追及で始まった商品開発も、1973年（昭和48年）

が出回るようになったのも、洗剤メーカーの配送コストの問題です。それまでふわっと溶けやすい洗剤

の第一次オイルショックで、洗剤不足の不安を経験し、洗剤供給の

溶けにくいものに変化してしまう。それで困るのは、溶け残った洗剤

安定、洗剤の少量化、ひいては環境面への配慮など、多様な視点が

が全自動式の洗濯機の内槽と外槽の間に溜まって、洗濯物を逆汚染

求められるようになりました。

効率的に溶かすかということを追及することも大切です。

また、共稼ぎの家族が集合住宅

で夜に洗濯しても騒音が生じない商品がヒットするなど、ライフス

スタイルの変化にも敏感でした。洗濯機についても敏感でした。ね

昔の「に変わってきています。昔のように農作業や泥んこ遊びで衣服が汚れるということは、ほとん

どなくなってきました。せいぜいが、「汗をかいた」といった程度

の汚れです。2001年8月に世界で初めて発売された、洗剤を

湯水が深刻だった夏を経験してからは、節水型の洗濯機が開発

されました。2槽式では通常200リットル前後の水が消費されてい

ました。2001年8月に世界で初めて発売された、洗剤を

使わずに洗う洗濯機の登場は、まさにこのような「軽度の汚れ」の

リットル前後の水が消費されてい

ました。このように「軽度の汚れ」の時代は申し子ではないでしょうか。

かけに資源全般への関心が高まり、

電解水の力と超音波洗浄方式を用いて汚れを落とす仕組みですが、

汗を落として衣服を清潔に保とうという考え方なら、充分な能力を持つています。無駄に洗剤を使つて、河川を汚染する心配もない、究極の環境配慮型です。

洗濯文化と洗濯機文化の関係

家電メーカーとしては、海外への輸出も積極的に行おうと当然考

えたわけですが、こと洗濯機に關しては、どうもそれが難しい。つ

まり、洗う文化が、国によってこれほど差があるものだと、想像

もしていませんでした。ですから洗濯機への要求も、国によって事

細かに違ってきてます。

日本では古くから洗濯の記述が見られます。『古事記』にも『今昔物語』にも『徒然草』にも登場

します。日本で、洗濯は、元来衣服についた邪気を払い、神に近づ

く「潔斎」、「みそぎ」の発想が根底にあると考えられています。で

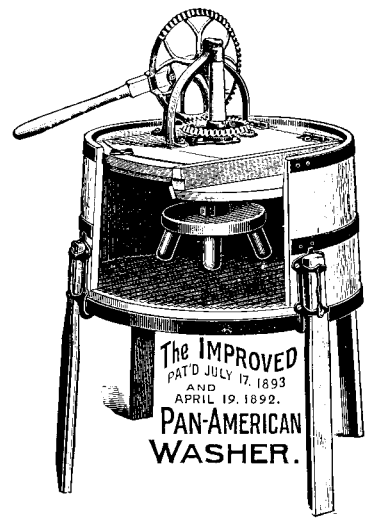
すから毎月決まった日には、そこから辺を浮遊する霊が乾し物に取り

付くから、洗濯はしないという俗信までありました。

日本の特殊性としては、何よりも水が豊富にあったということが

あると思います。このため、日本の洗濯は水をたっぷり使った「流

しすぎ」が主流でした。角型噴



年度	生活者の視点	洗濯機の特徴
1953	家事労働の軽減	角型噴流式 うずまき水流 1槽式輸入品の半値
1960	家事のスピード化	2槽式 脱水槽が加わる
1966	"	全自動式 洗い～すすぎ～脱水がすべて自動
1973	第1次オイルショック	
1974	節水思想始まる	少量型 使用水量大幅減、節水コース付き
1983	洗剤への関心が高まる	洗剤の再利用型 すすぎ水を次の洗濯に再利用する
1990	洗剤をよく溶かす	ファジー機能 コンパクト洗剤をよく溶かす
1991	洗剤の使用量減少化	洗剤目安装置 洗剤の使いすぎを防止
1991	"	超音波+電解水 洗剤利用半減以下 洗剤ゼロコース実現

戦後の洗濯機開発 洗濯機の機能と時代背景

流式の洗濯機も、その日本人の感性に合致した商品といえるでしょう。2槽式の洗濯機で流すすぎをしていくと、汚れていた水がだんだん澄んだきれいな水になってきて、汚れが落ちてきれいになつたという説得力につながります。後に全自動の節水型が登場して、中間脱水を行うようになり、洗った後の洗剤の泡を脱水で落とし、水をちよるちよると入れてまた脱水、これの繰り返しで洗剤を落としていくやり方ですが、流すすぎと同じ効果を少ない水で行っていると消費者は頭では分かっているても、感性としては納得してもらえない。ですから、洗いがつた洗濯物に鼻をくつつけて、「あら、洗剤の匂いが残ってる。やっぱりまだすすぎが充分じゃないんだワ」という話になるんです。また、水の性質の違いも、洗濯の仕方を決定する際の大事な要素となります。日本では軟水ですが、ヨーロッパ等では硬水が主流。水を豊富に使える日本では圧倒的にうず巻式ですが、ヨーロッパでは主としてドラム型です。ドラム型は、大変時間がかかるのですが、少ない水で、生地を傷めないで洗うことができます。石鹸を溶けやすくするためにお湯を用い、少ない水量で洗います。また住居が石造りのため、多少騒音がしても構

われないというスタイルの洗い方に落ち着くのです。では、アメリカはどうか。アメリカは基本的に容量が大きくなってはならない。棒が付いている攪拌式で、大物を時間をかけて傷めずに洗う、というスタイルになります。

「乾かす」の導入

乾すという感覚も、これまた違つてきます。一般的に日照時間が短い北ヨーロッパでは、「人の目に触れる場所に洗濯物を乾すのはけしからん」という風潮が主流です。日本も、徐々にそうなつてきています。ペランダに洗濯物を干すことを禁止するマンションとかが出てきているようですから。ホームランドリーのヒットは、そういう風潮が日本にも浸透してきたことがきっかけとなつたと思います。ホームランドリーという名前は1979年（昭和54年）、私が命名しました。下が洗濯機、上が乾燥機というものです。乾燥機の販売も、やはり驚沢感を払拭するのに時間がかかりましたが、「乾す所がない」、「乾す時間がない」というライフスタイルの家庭には爆発的に浸透していきました。もちろん時間がかかり電代がかさむ、洗濯物が縮むといった乾燥

機の欠点の克服がなされた上での話です。

コインランドリーのアイデアも僕が打ち出しました。ずいぶん銭湯などに通つて、置かせてもらいましたよ。昭和46年のことです。その時には、こんなものは普及するはずがないと言われていたものが、今では全国に1万店強のコインランドリーがあります。銭湯の片隅にひっそりあったコインランドリーですが、今では車で乗り付ける郊外型にシフトしつありま

す。こう考えると、洗濯に対する日本人の感覚も隔世の感がありますね。

土地の文化を知る

洗濯文化の違いというのは、風土、生活習慣、水の需給事情、湿度、家屋の構造等など、多岐に渡ります。しかし、日本の洗濯機が海外で売れない最大の原因は、価格が高く、小さいこと。日本と違って海外のメーカーは、いったん金型を作ったら20〜30年は変えないのです。ずっと同じ金型を使います。そのためもあってか、海外製品はものすごく安価で、大型の商品ができます。置く場所には困らないし、日本のように住宅が密集していなければ、騒音がしても気にならない。洗濯機の開発も、

やはり日本では微に入り細にうがつことが求められているんだなあ、と思いますよ。

そのことを証明する例として、イタリアのファブアーノという紙の産地で有名な所があります。そこにあるメーカーは、世界の洗濯機をOEMで生産、つまり自社の名前を出さずに、他の会社の名前で何社もの商品を委託製造している会社なのです。ヨーロッパを中心に世界各国から受注して、実際に大量の洗濯機がここで生産されているわけです。OEMという委託生産体制を取るメリットは、自社で作るよりコストが抑えられるからです。僕が企業人だつた頃、洗い、すすぎ、脱水、乾燥までできる洗濯機を作る企画が持ち上がり、このメーカーを訪ねました。新製品の製造には、生産用の金型やライン設備などに膨大な資金が必要となります。それを、世界の洗濯機を集中して作っているこのイタリアのメーカーに生産してもらえば、かなりコストを節約できるのではないかと考えたわけです。

ところが予想に反して、まったく使いものになりませんでした。一番問題になつたのは、振動です。結局、日本から防振機構を持つて行き付けたりしました。つまり海外から日本に逆輸入しても、「そのまま」では売れないのです。そ

洗うを洗う 土地の文化を知らないと洗濯機は作れない

「洗剤を使わずに洗いたい衣類」は？ (三洋電機調べ2000年)

下着類	45%
タオル類	31%
色物	28%
赤ちゃんの衣類	20%
シルク・ウール	18%
汚れの軽い衣類	18%
シャツ類	14%
バスタオル	12%
夏の衣類	9%
その他	26%

洗剤ゼロのコースが付いた全自動洗濯機



れだけ日本の消費者は、製品への要求度が厳しいということだ。

日本電機工業会洗濯機専門委員 長時代には、台北、北京、香港、マニラ、バンコク、クアラルンプール、ロンドン、ローマ、パリ、ハンブルグ、ロサンゼルス、シカゴ、オタワの個人の住宅を3年半ぐらいかけて訪問し、徹底的に現状を調べさせてもらいました。

そこでもわかったことは、何か。それは、「その国の文化を知らなくては、洗濯機は作れない」ということです。これほど輸出入の動きが少ない家電は、他にはありません。

洗剤とは、切っても切れない間柄

洗濯と洗剤は切っても切れない縁でつながっていると思えますが、相互開発の協調態勢はあったのでしょうか。

いやあ、まったくそんなものはないですね。食器洗い乾燥機の場合は機械が売れないと洗剤も出ない、ということと比較的仲が良いようです。洗濯機に関してはまったくそういうことはありません。洗剤を使って洗濯するようになったのは、近代のことです。日本で石鹼が登場するのは、室町時代

にポルトガルの宣教師が「シャボン」石鹼を持って渡来したのが始め。しかし、石鹼の存在や使用は一部の特権階級に限られ、一般消費者に普及したのは明治10年以降のことです。それ以前には、ワラ灰(灰汁)や米の研ぎ汁といった

自然系のものが使われていました。普通の汚れというのは、時間をおかなければほとんど水洗いで落ちるものです。ですから、こういった自然系の洗剤を使っているうちに、琵琶湖のような閉鎖性水域での富栄養化もあまり問題にならなかつたのだと思います。

僕は生まれも育ちも琵琶湖湖畔。今となっては信じられませんが、僕が子供の頃は、琵琶湖の水でお茶を入れて飲んだんです。それが「琵琶湖の水は汚い」というのが定説になってしまつて、悔しくなつて市民運動に参加するようになりまし。

先ほどコンパクト洗剤の話をしました。洗剤を入れる順番を考えた。お湯を使つたりと、洗剤を溶けやすくするための啓蒙を行いました。消費者には「洗剤を多く使えば、汚れがよく落ちる」といった誤解も潜在的にあつたため、これを改めるためにも、コンパクト洗剤を溶けやすくする機能や、洗剤量目安付き商品の開発も行われましたね。

洗濯機を通して

半世紀の日本の洗濯機の変遷のうち、約40年に渡つて関わつてこられた寺田さんは、今後、洗濯機に何を期待しますか。

「傷めず早く洗う」というのが、洗濯機一号機の使命でした。それが、「傷めず静かに大量なものを早く洗う」になつて、やがて「ラニングコストを安く」という条件が加えられました。今後は、それにプラスして「乾燥までできること」という要素が要求されるようになると思います。

皆さんご記憶と思いますが、以前は洗濯機は庭にありました。これはやはり、洗濯機がたらいの延長と捉えられていたことの表れでしょうね。家屋の内側に入つてきたのは、この20、30年のことです。しかし、これだけ多様な事柄が要求される家電製品が、雨ざらしで屋外に置かれるのですから、耐久性の面でも大きな開発努力が要求されたのです。

日本人の洗濯観も、「汚れたから洗う」から「着たから洗う」になり、汚れの程度は軽度になつてくるにもかかわらず、洗濯回数は増えました。昔のように着たり着た雀ではないので、洗濯物の量も圧

倒的に多くなつています。このようなライフスタイルの変化に合わせて、メーカーはますます努力することが問われていくでしょう。

でも自分が売つていたのに、このようなことを言つと何ですが、腰をかがめて、たらいに向かい、自分の手で洗つて、絞る。しわを伸ばしてパンパンとはたいて、物干竿に乾す。お日さまの匂いがする乾いた洗濯物を取り込んで、きちんと畳み、家族のそれぞれの引出しに直す充足感。こういったものは、洗濯機が進化すればするほど失われて、家事文化、洗濯文化が次世代に継承されないよう、で、ちよつと哀しくなりますね。

僕は、洗濯機も洗濯文化の一翼を担つ存在だと想っています。せっかく「充足感を共有できる家電」という使命を受けて、洗濯機が開発され続けてきたのですから、その経験を大切にしてほしい。そして、洗濯が文化として現代まで継承されてきたように、次世代にも伝えられるものでありたいと思います。洗濯は水が命、みずみずしさを失わない商品開発を期待しています。



あら
洗うを洗う

技術者が語る洗剤の戦後文化史

白もの信仰と清潔な香り

合成洗剤 VS 粉石鹼

私が入社した戦後すぐは物資欠乏の時代で、油脂を使わない粉石鹼の代替品のようなものを開発していました。ただ、包装の問題もあって固まりやすく、サラサラした粉にならなかった。困っていると1948年頃から、いろいろな海外文献が入ってくるようになりました。それを見ると、米国では石油を原料とする合成洗剤というものがある。そこでも開発しようということになりました。

産（現三井物産）がアメリカから合成洗剤のベースになるアルキルベンゼンを業界に紹介してくれました。これを出発点に、一斉に各社が開発し、1951年は合成洗剤の幕開けとなりました。当時はこれこそ新時代の洗剤だと言っていましたよ。

一方、粉石鹼や化粧石鹼が伸びてきていまして、これと洗濯機の普及が相乗的に消費を拡大していました。会社の創立記念日の時にあの松下幸之助さんが来られて「粉石鹼という良いものを作ってくれたので、洗濯機も伸びた」と挨拶してくださいました。こちらからすれば、「洗濯機ができたから粉石鹼も売れた」ということです。1950年代というのは、粉石鹼がどんどん増えていった時期でもあります。



藤井徹也

財団法人洗濯科学協会会長

1923年生まれ。1942年 東京大学工学部応用化学科研究生。1946年ライオン油脂株式会社入社。商品研究所長、家庭科学研究所長、広報部長を務める。83年退社。85年日本石鹼洗剤工業会専務理事に就任。1984年藍綬褒賞授与、農学博士。



かかりました。

合成洗剤が粉石鹼を追い抜いた秘密は、リンの化合物にあります。当時国内に2社あった化学メーカーに大量発注して、洗剤の30%ほど入れられるようになり、やっと粉石鹼なみの洗浄力がついてきました。ただ、やはり問題は残っていました。合成洗剤は濃度が薄くても泡がよく出る。3回、4回とすぎをしても、泡が消えないため、河川への影響が取り沙汰されたのです。洗剤成分が0.5ppm残存しただけで泡が出てしまうので、水道水の基準では、それ以下にするように濃度が規制されています。しかし、石鹼だとその百倍あっても泡は出ないのです。

地域により異なる水と洗剤の普及

日本の水の平均硬度というのは5度（水1リットル中に酸化カルシウムが10ミリグラム含まれるとき硬度1とする）程度で軟水です。もちろん、鍾乳洞のできるような場所の水は硬度が10度以上もある硬水ですが、日本の水は基本的には軟質です。余談ですが、旧国鉄（現JR）は蒸気機関車を走らせていましたが、水の硬度が高くカルシウム分が高いと、釜の中に石灰のカスが溜まってしまつた。です

から、全国の機関区の地元の水の硬度を調べていました。

石鹼は、水によって汚れの落ちが違つてきます。水により汚れ落ちが違つたということは、合成洗剤にはなかつた。ほとんどの硬度の水にも、同じように効力を発揮できるのが、合成洗剤の強みです。逆に言えば、日本で合成洗剤が最初なかなか伸びなかつた理由が水が良いからということもあるわけです。欧米では、硬度が30度もある所がある。こうなると石鹼は全然効きません。このため、早くから合成洗剤が発達していました。日本は粉石鹼で間に合いますからね。私はそう思っています。

次の問題はすすぎの泡をいかに減らすか。この問題の解決には数年かかりましたが、合成洗剤は粉石鹼と洗浄力は同じ程度で溶けも早い。カスも出ないということで、1960年頃から普及していきました。昔は各社とも2年に1回ぐらいい新製品を出していたし、1社で5品種ぐらいの洗剤を出していました。値段は粉石鹼より若干高かつたのですが、量は粉石鹼より少なくて済みますので、1回当たりの洗濯コストは安くなりました。大量生産でコストが安定したこともあり、1963年には合成洗剤が粉石鹼を追い抜いてしまいました。それから、合成洗剤時代が到

来したということになるはずですが、それはいかなかつたわけです。

生物分解性という基準

1962年に、「合成洗剤は安全ではない」という説が出ました。これはわたしたちにも勉強になりました。合成洗剤に含まれる界面活性剤というのは、アメリカでは発育が早くなるので動物の飼料にも入れていたほどです。有害物質の濃縮という問題があつて、アメリカでは界面活性剤の毒性について非常に詳しく調べられていました。また、1964年頃から河川や湖沼における発泡公害が方々に発生し、これを解決するために、先進国の間で、化学物質の生分解性の基準を定めて直ちに施行されました。つまり、合成洗剤も水中の微生物が分解できるような化学構造を持ったものに変えていったわけです。

自然界には微生物による自浄作用があります。川には微生物が水中にいて、昔は「水に流せ」といつても川に捨てていましたが、それは生物分解性のあるものがほとんどだったため、長い間には菌が食べて分解してくれていたわけです。石鹼は生物分解性は良いのですが、量が多くなると酸欠にな

つて、今度はヘドロが溜まつてしまつという難点もあつた。これについては全国の自治体に出かけていつて、議論しました。

1983年に厚生省（当時）が『洗剤の毒性とその評価』というレポートを出しました。この冒頭に安全についての考え方が書かれ、奇形や慢性毒性の問題は否定されました。国の見解ということ、全国の消費者運動は次第に沈静化していました。

気になる汚れとすすぎの観念

イギリスでは日本と違って、水の使用量が少ないのです。1970年当時の話ですが、NHKの取材班の人がある家庭にうかがつて、食事の片づけを見ていたそうです。奥さんが皿などを洗剤の入つてい

る桶に突っ込んで汚れを落とす、洗い籠に入れていく。まとめてすすぐのかなと思つて見ていると、後で乾いたタオルで拭いてそのまま棚にしまつてしまつた。びっくりしたそうです。これを放映したら、「あの洗剤を教えてください」とNHKに問い合わせがかなりきたという事です。それは日本で売つてい

るものと同じ、普通の台所用洗剤だったのですが、「衛生的」という観念が全然違つたのです。それで、今はどうかと思つて、先頃、イギリスに住んでいるある大学の先生に聞くと、「今でも食器はすすがない」と言っていました。今だにです。清潔意識が違つたという点は確かにあると思います。また、ドイツ人の奥さんを持つた日本人から以前聞いた話ですが、彼は「家では日本の洗剤を使つていない」と言つたのです。「なぜですか」と聞くと、「汚れ落ちが悪い」と言つた。「だからドイツの洗濯機を使つてドイツの洗剤を使つている」といふのです。何がいけないのか。よくよくうかがつてみると、「日本は水洗濯です。水では汚れは落ちません」と言つたので、ドイツの洗濯機は90度ぐらいまで温度が上がりますし、米国は60度ぐらいです。ヨーロッパのほうが高い。ドイツは「煮洗い」をするわけです。さらに、漂白剤を入れます。ところが、日本の洗濯機は漂白剤が入っていないし、温度は低い。そこまで言われると、確かに汚れ落ちは負けます。ただ、そこまでしないと落ちないような汚れは日本では洗濯機では洗わな

らしいものです。洗う習慣として、煮洗いは日本になかった。煮洗いの有無は、油分をたくさん食べる体質や汗などの分泌物の差ではないかという人もいます。彼らは風呂にはあまり入らない。せいぜいシャワー。だから余計に洋服につくのかも知れないですね。けれど、体臭は気にして、制汗剤や香水を使う。気にする汚れが国によって違うことの表れです。

除菌と殺菌は違いますが、合成洗剤には殺菌作用に似た作用があります。これを除菌と言っています。除菌というのはわれわれにしてみればあたりまえの話で、あるメーカーがテレビコマーシャルで使い出してから、一般的になった言葉です。消費者にもそれまで除菌という概念はなく、消費者の感覚が商品PRで作られたという例でしょうね。

まあ、まな板などは塩素系の洗剤を布に浸して覆っておけば消毒にはなりますが、昔はそこまでは考えていませんでしたよ。別に、そうしなくても病気になるわけはないですから。ただ、テレビを見ると、濡れた真っ白い皿が出てきて、奥さんが乾いた布でそれを拭くと、「キュッキュ」と音がする。やはりそういうものがいいのかなと思ってしまうのですね。それに対して、「そこまでする必要は

ないでしょう」という運動は、主流にはならなかったと思います。

白もの信仰

日本人は韓国の人と同様に、白いものは清潔だという感覚があります。ドイツで開発された蛍光漂白剤という染料があります。これは白い綿布に染色させると紫外線を吸収して可視光線に変える性質があります。1953年頃、これを粉石鹼に入れました。本来、木綿の白布を洗うと黄色くくすんでいくのが自然なことです。それをこの粉石鹼で洗うと、黄色っぽい木綿が白く見える。洗濯屋さんでは古くから「青味付け」といって青い染料を入れていました。要するに青い染料を、白いものに薄くかけるわけです。すると、見た目に青白くなって、より白い感じになる。しかしこれは目の錯覚なのです。蛍光漂白剤の成分も生物分解性です。これを洗剤から除いたら、多分「色落ちが悪い」とか

「白ものがきれいにならない」と消費者から言われるでしょうね。ただ、粉石鹼には入っていないので、石鹼しか使わないと木綿が黄色っぽい白色になってきます。これを「黄ばた」と言っています。この二つは、清潔さとはまったく関係ありません。単なる色味の問

題ですが、白いものはより白くという感覚は、日本人の清潔感が根底にあるのでしょう。

ただ、蛍光漂白剤が出る前は、そのような白い色を消費者は知らなかった。今、私達が洗濯物で真っ白と思っている「色」は、戦後になって知った色です。そして、一度それを知ってしまうと、なかなか抜けられない。

このように日本人には、強烈な白色信仰がある。例えば化粧石鹼も、圧倒的に白が多いです。白でないとなかなか消費者が買ってくれないのが、現実です。

きれいな匂い

石鹼に香料が入るようになったのは、戦前からですが、技術があまり進歩していなかった。戦後、欧米からいろいろな石鹼が入ってくると、どれもいい匂いがして、それが商品開発の刺激となりました。現在あるラベンダーなどの花

の匂いは、すべて戦後から始まったものです。

私も、かつて化粧石鹼の開発を手がけましたが、匂い選びにはずいぶん苦労しました。万人が好む匂いであることが理想です。「良い匂いだけれど、他の人はそう思わない」というのでは、一般家庭商品としては失格です。香料会社の人に、「こんな匂い」と言っても相手に伝わらない。そこで、赤い匂い、青い匂い、黄色い匂いと色で表現して、それを共同開発の相手に覚えてもらいました。匂いは怖いものですね。高級石鹼の代名詞だったキヤメイは、あの匂いだからキヤメイなのであって、匂いを変えるとキヤメイでなくなってしまう。匂いを変えたために、本当に売れなくなってしまうことが。

まれる匂いを作ることは、実は大変なことなのです。こんなことがありました。新製品の匂いを2種類に絞って、1つは大変良い匂いだがコストが高い。もう1つは安いがあまり良くないので高いほうを推したのですが、採算が取れないので紛糾しました。結論は社長の鶴の一声「コストが高いのは宣伝費と考えよ」これが、幸運なことに大ヒットしました。

おもしろいことがありましてね。主婦に試作品を2つ作って評価してもらおうのですが、あるときまったく同じ成分のシャンプーを匂いだけ変えて、比較してもらったんです。すると匂いの良いものが、泡立ちも良いすべて良いとなる。匂いしか変わらないのに、です。これは匂いというものが大変な力を持っているということの証明です。昭和40年代は、もうシャンプーなどのトイレタリー商品はどこも拮抗していましたから、あとは匂いで付加価値をつけようという競争



洗うを洗う 白もの信仰と清潔な香り

期	年代	生産量 (千トン)	特記事項
石鹼時代	1940年 昭和15年	石鹼 206	第2次世界大戦終結 1945年
	1950年 昭和25年	石鹼 96 合成洗剤 2	
揺籃期	1951年 昭和26年	石鹼 148 合成洗剤 5	石油系合成洗剤登場 1951年 台所用合成洗剤登場 1956年 住宅・家具用合成洗剤登場 1960年
	1960年 昭和35年	石鹼 347 合成洗剤 86	
高度成長期	1961年 昭和36年	石鹼 299 合成洗剤 150	ヘビー合成洗剤本格化 1961年 石鹼と合成洗剤の生産量が逆転 1963年 合成洗剤の安全性問題が発生 1961年～ 合成洗剤の発泡公害とソフト化 1967年～
	1970年 昭和45年	石鹼 151 合成洗剤 626	
安定成長期	1971年 昭和46年	石鹼 144 合成洗剤 647	合成洗剤のソフト化率 98.5% 1972年 富栄養化現象が社会問題になる 1972年 日本石鹼洗剤工業会、 洗剤中のリン分自主規制 1975年 瀬戸内海環境保全特別措置法制定 1978年 琵琶湖富栄養化防止条例制定 1979年 無リン合成洗剤出現 1980年
	1980年 昭和55年	石鹼 198 合成洗剤 775	
成熟期	1981年 昭和56年	石鹼 190 合成洗剤 828	『洗剤の毒性とその評価』発刊 1983年 洗剤の無リン化率 95% 1985年 コンパクト型洗剤の出現 1987年 コンパクト型洗剤のシェア 80% 1989年
	1989年 平成元年	石鹼 180 合成洗剤 934	

石鹼の生産量推移 (10年毎) 合成洗剤の生産量推移 (10年毎)

日本における石鹼、合成洗剤の発展史

藤井徹也『洗剤—その化学と実際』幸書房 1991より

半世紀を振り返ると

戦後、「洗う」という仕事はす

が激化していきました。丁度、今30歳代後半から40歳代の方々が生まれた頃です。

今のような液体のシャンプーやリンスも出始めたのも同時代で、それ以前は粉末でしたよ。

リンスについてもこんな話があります。リンスは静電気除け、櫛の通りをよくするために使うわけで、大体の人は風呂で髪を洗います。洗い終わりに髪を洗って、同じつけるなら、リンスをスプレーにしたらどうだろうと売り出したことがありましたが、これはあまり売れませんでしたね。やはり液体タイプでないとダメ。要するに、夜、風呂に入ってシャンプーしてリンスをするという一連の動作の中で使ってもらうものでないとダメなのです。一度洗った後に夜、整髪料としてリンスをつけるというところは、リンス効果という点ではどちらも同じなのに消費者には受け入れてもらえませんでした。それと、これは強調しておかなくてはなりません、これだけ液体シャンプーやリンスが伸びてきた隠れた理由は、ポリボトルの普及です。これで液体ものは飛躍的に伸びましたね。

べて、とにかく楽になりました。私は欠乏の戦後から高度成長期にほとんどの商品を手がけてきましたから、特にそれを実感しています。また商品に関連して安全性や環境問題も勉強できました。当時、2000年頃になったら、誰か新しい洗剤を開発してくれるかなと思っていましたけれど、結局何も変わらなかつたですね。

少量の水でいかに洗うかということは、これからのテーマになってくるでしょう。洗うということ、究極的には水の問題ですから、例えば、電機メーカーは「洗剤のいらぬ洗濯機」を考え、われわれは「洗濯機のいらぬ洗剤」を考える(笑)。

結局、今後はどこに技術のテーマがいくかという、「使い捨て問題」です。さらに言えば、いつか化石資源依存から脱却しなければならぬのではないかと思っています。私は、地球が砂漠化しようとしている時代に、いつか、破綻が来るのではないかなと思っています。私の時代には洗剤の質として環境負荷の問題を解決しましたから、あとは、消費資源の問題をどう解決するかが問われますね。



清潔感を洗う

「洗う」で何が見えてくるのか

京都・清水寺を訪れると、音羽の滝で水を飲む人々の姿を見ることができる。アルミのひしゃくを使い、みんなが代わる代わる水をすくい取って飲む、日本ではおなじみの風景である。しかしよく考えてみると、抗菌グッズが売れ、ミネラルウォーターに金を投じる時代になった現在、一方で他人が口をつけているひしゃくを汚いとも思わないのは、少し不思議な気がしてくるものである。人は、音羽の滝の聖性にそのようなことは気にならない力を感じるのか。それとも、多くの人が飲んでいることに安心感を覚えるのか。大いに

手を洗う、心が洗われる、身を浄める、布巾を洗浄する、垢を落とす、洗車をする、野菜を洗う

。「洗う」という行為一つをとっても、そこには多様な「水とのつきあい方」が存在する。すべての文化が、気候、風土や地域、民族などの背景を持って形成されてきている以上、「洗う」文化も例外ではありえない。

今号のテーマは「洗うを洗う」。洗うことをいろいろな観点から掘り下げてみると、その多様性に驚かされ、それは同時に洗うという言葉の持つ多様性ともなってくる。これらを交通整理することで、重なりあつて見えにくくなっていたものを浮き上がらせる試みをしてみた。洗うというからには、落とさなくてはならない「汚れ」があるはずだ。その落とす行為が「洗

う」ことである。「洗う」が多様性を持っているのは、この「汚れ」に多様性があるゆえである。

2つの「汚れ」を洗う

1つは、単純な泥汚れ、油汚れ、垢じみた汚れなどである。汚れが落ちた状態は、目で見て「きれい」になっている。この汚れは不純物が付着したと考えられ、付着物の性質に応じた落とし方が開発されてきた。その手段、方法は、高度経済成長期に飛躍的に変化して、現在に至る。

もう1つは、「穢れ」(けがれ)である。穢れは精神性の汚れであり、宗教や信仰とも密接な関係を持つ。穢れが意識されると、その穢れを払う宗教的な機能も発達していったことは想像に難くない。

穢れを払った後の状態は「清い」と表現される。

日本では清めの儀式に広く使われる塩は、実際に防腐効果も持っている。葬式の帰りに玄関先で時々塩は、「家の中に穢れを持ち込まない」と同時に、「腐敗した死体あるいは伝染病の死体に接したあとの消毒」のためでもあると考えられる。

この点について検討したのが文化人類学者のメアリー・ダグラスであり、今や古典となつている『汚穢と禁忌』(塚本利幸訳、思潮



社 1995) (原題はPurity and Danger: An Analysis of Concepts of Pollution and Taboo) & Mary Douglas & Aaron Wildavsky, Risk and Culture (University of California Press, 1982)の中で、リスク感覚と穢れと秩序の関係に注目している。

穢れたものは危険なものでもあったが、その穢れや危険と捉える感覚と意思決定は文化により異なることを指摘している。これを彼女は世界各地の原住民の生活等から導き出した。要は、「公衆衛生」観念が誕生する前は、安全の保証と「穢れを浄める」ことが、同じレベルで用いられていたのである。では、高度経済成長期に飛躍的に進化を遂げた、目に見える汚れについても追ってみよう

清潔感は新しい

私たちが常識と想っている清潔感の歴史は、実は意外と新しい。

例えばフランスの社会史家ジャン・ピエール・グベールの『水の征服』（パピルス社、1991）



を読むと、19世紀フランスの富裕層でも毎日身体を洗うことが例外的習慣であったことがわかる。

お湯の入った小さな壺が運ばれてきました。

「今日はどこを洗おうかしら。」

「そつですわ。」

アルザス出身の女中が、ためらいながら、お国なまり丸だして答えた。「顔にしますか、首にしますか。」

「首ですって。だめよ。そこは昨日洗ったもの。」

「そつですわね。じゃ腕を肘まで洗ってばどうでしょう。」それじゃ袖をまくってください。」

「ここには、「清潔」を、ここから気にする風情は感じられない。ま

あ匂いがしないくらいに洗ってお

こうという程度なのだろう。水が豊かな日本とフランスでは比較で

きないだろうと思われる方も、日本の入浴史を見れば納得できるはずだ。入浴は日本でも日常的な行

為ではなかったことに変わりはない。日本は風呂は、空間的にはハレの場として位置づけられて

おり、現在に近い「きれいになるための入浴習慣」が現れたのは、近代風呂が家庭に普及する大正時

代になってからのことである。その風呂もけっして清潔というわけではなかったらしい。民族学

者の吉田集而は『風呂とエクスタシー』（平凡社、1995）の中で、



風呂の本来の用途をシャーマニズムにおける「恍惚感」を得るため

と推測し、かつては「風呂に入る」という価値と「きれいになる」という価値とは切り離されていたと述べて

いる。この大正時代頃からの風呂の在り方の変化は、家の間取りにも現

れている。例えば、1910年（明治43年）に箕面有馬電気鉄道

（現阪急電鉄）が大坂郊外の池田

町で開発した住宅の平面図を見ると、風呂はどこも北の片隅の台所

に隣接して置かれ、外から入るようになっていて、外風呂が家に隣

接しているという感覚だ。これが住宅営団（後の住宅都市整備公団）

規格の集合住宅の間取り（1942年、昭和17年）になると、ほぼ現在の風呂のイメージと変わらな

くなり、部屋の一つとしての内風呂の役割としての「ハレ性」は薄れ、部屋に求められる「清潔性」が風

呂にも現れるようになってきた。どうも、風呂における清潔感の常識は、大正時代頃に端を発しているようだ。

それでは、洗濯はどうなのだろうか。

ライフスタイルの変化は清潔感を変える

ライフスタイルが激変すると、人々の清潔感も変わってくる。か

くして洗濯の技術も、変遷を余儀なくされるのである。

かつては、ほどほどに汚れが落ちれば良かった。服の素材は綿が主であったし、油性の汚れも家庭

ではそれほど多くなかったことだろう。ところが、洗濯機と洗剤が普及し、汚れが目に見えて落ちる

ようになった。なおかつ、その白

さはきらきらと光る「真っ白」、漂白された白さであったし、青味

付けして強調された白さであった。清潔な「匂い」もついていた。い

つのまにか消費者は「白く」ならぬ、「きれい」を判断する術が失われていった。

「何を見て清潔と感じるか」という点について、スーエレン・ホイ

は『清潔文化の誕生』（紀伊国屋書店、1999）の中で興味深い



指摘をしている。19世紀後半から、アメリカ人の生活の中で清潔感が

衛生感と同じ意味で使われ、白木の信仰が蔓延するようになった

というのだ。この書は、白木の信仰が、アメリカン・ライフスタイル

と密接なつながりがあることを教えてくれる。

「清潔感」とは

「ここまで何気なしに「清潔感」という言葉を使ってきたが、広辞苑の「清潔」の項には、「茶の湯

は清潔にしてさはやかなるを本と

し」という、1665年に浅井了意により書かれた『浮世物語』の

用例が引用されている。清潔の「清」は「きれい」という意味で、

英語の pure and beautiful の両方の意味をもっている。また、「潔」

は、「潔斎」という言葉からもわかるように、心身の穢れを断ち、

清浄を保つことを意味している。「茶の湯は清潔・・・」というのは、

この三つの意味がミックスされて用いられているのだ。ここで、冒

頭で述べたきれいと清いが登場する。日本語の清潔の言葉の中には、

両方の意味が込められているのだから、洗う概念が整理して受け止

めにいくのもうなずける。もう一つ「清潔」と同じ意味で

用いられている言葉に、「衛生」という用語がある。おおざっぱに

言つと、病原菌や有機物、有害物質などを限度以上に含まないこと

である。この「衛生観念」が広く日本に持ち込まれたのは、実は明治時代になってからのこと。衛生

という言葉も、英語の hygiene を、長与専斎が漢字に直したものだ。

長与専斎といえは、幕末、緒方洪庵の適塾に学び、明治維新にあ

たっては岩倉遣欧使節に加わり帰国後は内務省衛生局長を歴任して、コレラ予防など日本における医療衛生行政の設計者となった人物で

ある。水道の整備も、元はと言えばコレラ予防が発端となっている。水道水には衛生的な意味で清潔であることが求められる。大腸菌はゼロ、一般細菌も規準以上含んではいけない衛生的な水道水は、結果として「安全性」を保証した水となる。この「衛生的な清潔」は約150年前の明治時代になってから入ってきた観念だ。

衛生観念の誕生

そもそも、明治維新まで庶民と汚れの距離は非常に近かった。『洗う風俗史』（未来社、1984）



の著者、落合茂は、江戸時代末期の洋学者佐久間象山による妻の心得を説いた言葉を紹介している。

「夫の衣類をば心に入れて度々見及び垢つきたるをば濯ぎ清め、損ねたるをば取り繕い、いささか粗末なきようあるべし」(『女訓』)

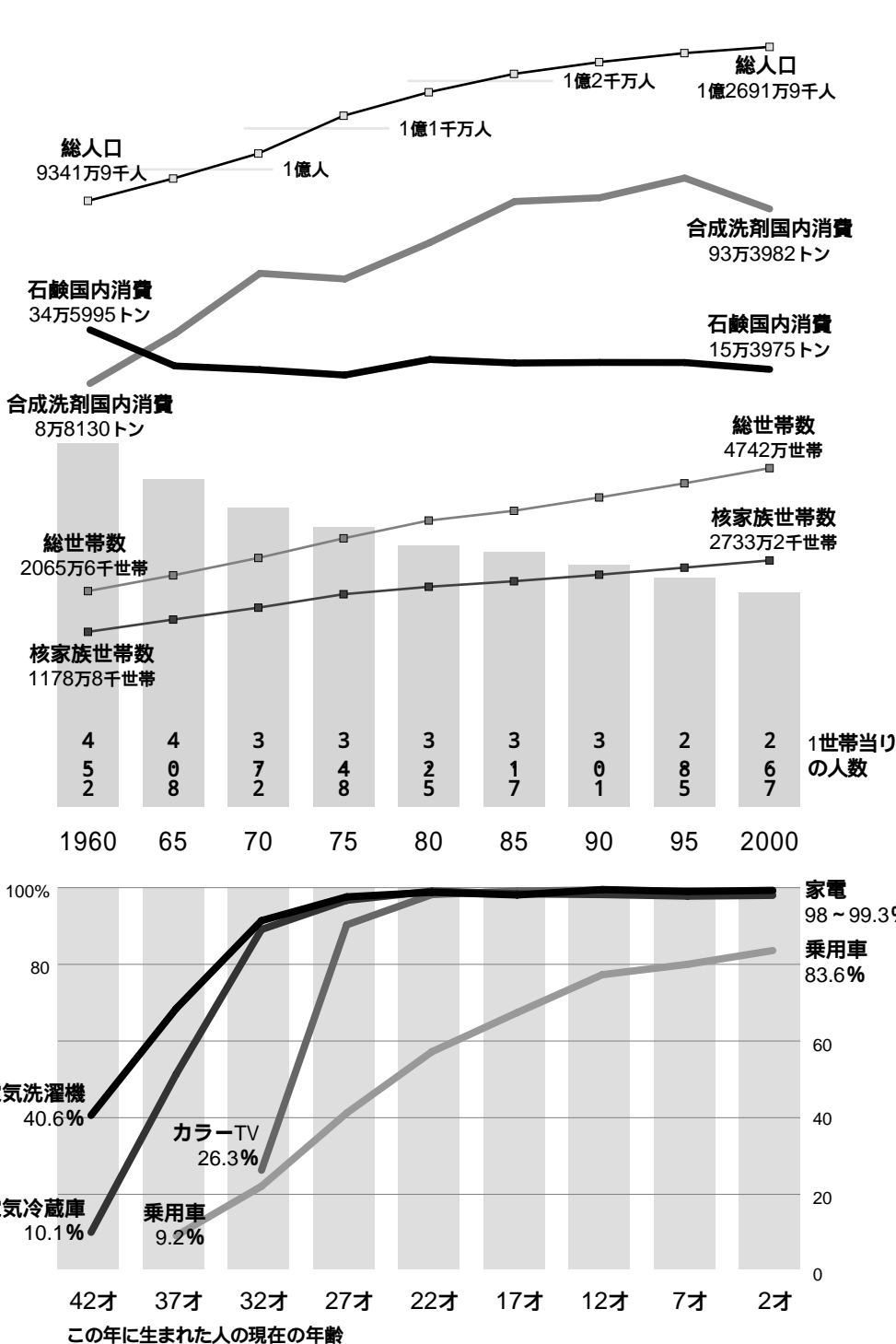
「夫の衣類が汚かったら、きちんと洗いなさい」と説いているのだが、わざわざ論すべからぬのだから、逆に暮らしの現場では汚れがごく

身近であったことがよくわかる。日本の洗剤の歴史について記した文献は数少ないが、その中でも秀逸なものに花王(株)が創業83周年記念に制作した『日本清浄文化史』(1971、非売品)がある。それによると庶民は灰汁などを石鹼の代わりに用いていたが、

文明開化の1873年(明治6年)には民間最初の石鹼工場・堤石鹼製造所が創業を開始。以後、続々と石鹼メーカーが現れ、日本中に石鹼が普及していく。「美洗粉」と呼ばれる現在でいうシャンプーも登場する。

大正、昭和時代になると家庭生

活も近代化し、1930年(昭和5年)に東京芝浦電機(現東芝)が国産電機洗濯機第1号(回転式)を発売する。これは1940年(昭和15年)までの間に5千台を製造したというが、庶民向けのものではなかった。その後第二次世界大戦、敗戦、戦後復興をはさむこととなるが、何と云っても洗濯に革命的な変化をもたらしたのは昭和30年台の水道普及・家電革命・高度成長だった。高度成長によるライフスタイルの激変は、洗濯における清潔感をも大きく変えることとなったのである。



上：日本の洗剤消費と人口、世帯数の推移 洗剤の国内消費高推移は日本石鹼洗剤工業会『石鹼・洗剤・油脂製品・原料油脂年報2000年版』より 下：家電及び乗用車の普及率

家電革命と家事省力化

まずは、水道の普及。上水道が日本の各家に普及したのは昭和30年代（1955年～1965年）だ。1960年には約40パーセントだった普及率が、10年後の70年には80パーセント近くまで伸びた。家に水道が引かれるまで、水がどこから来てどこへ流れていくのかということは、生活者と身近な関係にあった。しかし、上下水道の普及により蛇口と排水口以外に水は見えなくなってしまう。かつては、用途に合った水を、井戸、川、わき水、天水など異なる水源から求めていたが、現在は常に衛生的にきれいな水を、用途おまけいなしに水道が供給してくれる。

この水道普及に合わせるように、洗濯機も爆発的に普及した。世帯当たり普及率も1960年からのわずか10年間に倍増し、70年には10軒に9軒が保有するまでになった。

同様に、洗剤の消費量も爆発的に増えた。戦後の洗剤史は合成洗剤の時代とも言えるもので、その国内消費高も洗濯機と同様、急激に増加した。

まさに家電革命と言われた時期。それは特に主婦に何をもちたのだろうか。NHK放送文化研究

所の『日本人の生活時間2000』（NHK出版、2002）は、主婦の家事時間（洗濯、炊事、掃除）の推移をまとめている。1960年、主婦は4時間26分を家事に費



やしていたが、40年後の2000年には3時間49分と37分下がっている。

家電製品が女性の家事省力化をもたらしたことは確かだが、家事時間がその分減ったというよりもむしろ、洗濯をしながら「掃除」「炊事」などをし、「・・・ながら行動」が可能になった。このため、並列的に家事をこなすことができるようになり、家事の省力化が大いに進み、洗濯は手軽になった。手軽化したというとは、清潔な水を得ることも手軽になったし、汚れたという事だ。

清潔感のバランスを取り戻すことはできるのか

風呂も、洗濯も、洗いのものも、トイレも、すべて衛生的な水道で

得られる膨大な生活用水がまかなってくれる。そして、いつのまにか衛生的にきれいな水でない、すべての用途に対しても満足できない人々が増大してしまった。このことは、衛生感が客観的な装いを持つているだけに、歯止めをかけるのが難しい。

しかし、こうした衛生感の膨張は、水道普及、家電革命など、かなり人為的な条件が重なり作られたものであることもわかってきた。ならば、時代にに応じてわれわれ自身のライフスタイルやものの見方を少し変えてみることで、「洗うこと」における人と水のつきあい方も変えることができるのかも、しれない。

まず、自分たちが洗う場面における「清潔」感覚や、そこに使う水を点検してみる。洋式トイレの便座は毎回消毒しなくはいけないのだろうか。車は毎週洗わなくてはいけないのだろうか。売られていた野菜には泥がついていてはいけないのだろうか。なぜ日干した洗濯物の太陽の香りは心地よいのだろうか。なぜ、なぜ・・・求められる清潔感が一樣でないことにちよっと気づくだけで、水とのつきあい方は違ってくるだろう。

第二は、水が地域の共有資源として認知されていると、自ずと「汚いものは出さないように」と

か「無駄な水は使わないように」などと、水に気を遣うようになる。汚い水を排出しないようにルールも生まれるし、自分の水の使い方、が地元に適しているのかチェックさせられる。滋賀県長浜市で10年ほど前までは井戸番が生きていたし、温泉をコミュニティとして守り管理している例は、地域として求められる清潔感を残していくことにつながるだろう。

第三は、衛生感覚が膨らみすぎた個々人の清潔感を、バランスのとれたものにする試みである。衛生観念の誕生は、明治からたかだか150年。それ以前は、経験値から得られたいわば生活の知恵の範囲内で、きれいな状態のバランスを保っていた。数値や流動する価値観に惑わされず、自分の物差しと余裕が欲しい気がする。

住宅の外壁を洗う商売があるが、付いた汚れは洗い流せても、外壁そのものが紫外線や風雨に曝されて変質してしまえば、その汚れは落とすことができない。これを「劣化」と呼ぶ。ところが面白いことに、劣化と同様に素材本体を変質させながらも美しく変身する例が「経年変化」である。

何百年もの歳月を風雪に耐えた神社仏閣の樺（けやき）の柱、はき込んで体に馴染んだジーンズ、髪の毛が染み込んで色に変わっ

た柘植（つげ）の櫛。これらを劣化した、きたない、と感じる人間がいるとは考え難い。落とすべきものは汚れるのだから、経年変化したものに落とすべきものは見当たらないし、劣化してしまつた素材のきたなきさは落とす手段が見出せない。したがって、これらは洗えない汚れなのである。洗う必要がないものまで洗うことを見直し、洗わなくても済むものを使つていくことも、これからの時代は選択肢に入れるべきであろう。

清潔嗜好が助長されつつある現在、洗うことに欠かせない水が、いかに重要な存在であるかが改めて認識される。用途に合った水利用に気づくこと、水を共有財産として意識すること、きれいに對する自分の物差しを持つことの3つが、とりあえず今の段階で私たちができることなのではないだろうか。

清潔感が社会の水の消費を左右するならば、少しばかり「洗う文化」、「洗う感覚」を見直して、バランスの取れたものにしていくべきものである。



シャボンの香り

松本 葉

イタリアの姑は家族の健康に気遣い、みんなで囲む食事作りに熱心で、近所のヒトの噂話にも熱心で、買物が好きで、サツカーも好きで、それより好きなのが美容院通いという、典型的なイタリアの主婦である。身の丈に合った暮らしを好み、慎ましやかだが、ときにドンと大きな買い物をして家族を驚かせることもある、そんなヒトだ。

暮らしを回すそのやり方はクラシックで、ときにもどかしいほど手動を好むのだが、それこそ彼女の手にかかると家の中はきちんと片付き、洗濯物はきれいに仕上がり、時間はかかるが肉の煮込みはホックリできる。

秘訣を聞けば「ゆっくりやること、気楽にやること、イヤな日はやらないこと」とサラリと言っ。といつても彼女にイヤな日はないようで、いつ行っても姑は太めのウエストにエプロンをまき、手でも落ちた水でも埃でもチヨコチヨコツと拭く布巾を肩にかけ、歌をつたいながら働いている。廊下の鏡を見ながら

ら髪に手をやり、近づいては皺を嘆き、嘆いてもしょうがないわねと独り言をつぶやいては再び手を動かす。

「料理は苦手よ。いつも母にお前は下手だねって言われたもの」

いつだったか、家事のなかで何が一番好きなのか尋ねると、彼女はまっさきにこんな風にしたものだった。意外な答えに「へえ」と私が驚けば、笑った彼女がこう言った。

「一番好きなのは洗うこと」

そういえば、姑がもつとも楽しそうにする家事は、洗濯やら食事の後片付けや床掃除といった「洗う」作業で、思い出してこう言えば彼女が照れながら「気持ちいいんだもの」とささやいた。

もちろん洗濯機はあるのだけれど、姑はどちらかというと手洗いを好む。洗濯機はシーツやタオルといった彼女の言うところの大物用で、使う日は「今日は洗濯機を回すけど」と家族に声をかける。色物と白い物をき

つちり分ける上に、洗濯機は満杯にならないと回さないから出番は少なく、数年前に息子たちからプレゼントされた新型のそれも所在なさげだ。

「いまどき、分けるなんて。なんでもつつこめばいいじゃないか。せつかくあるのもつたない」

家族にこう非難されては「もつたないから大事にしてるんじゃない」と言い返すのはいつものことだが、これは彼女独特の心遣いで、手洗いが好きなのよ、とある時、教えてくれた。

「機械にまかせるのは心もなくてね。きれいになっていくのを見るのがいいの。ストレス発散かしら」

姑とストレスはどうみても結び付かなかつたから私が思わず笑つと、「アタシにだって」と不満そうに言った彼女が真面目な顔でこう続けた。

「水がカタイからクスリを入れなきゃならないでしょ。あれも煩わしいのよ。煩わしいけど機械が石灰だらけになつて壊れて

もね。いろいろ思うとつい、手になっちゃうの」

イタリアの水は硬水で、石灰がとて強い。触れるぶんには気がつかないが、水を使う場所は水分を拭き取っておかないとあつと言つ間に石灰がこびりつく。蛇口でも食器でも放つておくと白い濁りがすぐにつくのだがこれがたまる厄介で、特に機械ものは故障の原因になるといふ。だから洗濯機でも食器洗い機でも通常の洗剤のほかに石灰を溶かす、彼女が言うところのクスリを入れなければならない。

私自身、住みはじめた頃はこの石灰の強さに仰天した。これが噂に聞いた硬水とばかりに白い濁りを眺めたものだった。お湯をわかすポットの内側をこすると白い粉がポロポロと落ちて、これが体のなかに入っているのかとゾツとした。そういえばこの話を姑にすると彼女は「二ホンの水にはないの？」とびっくりにした声を出しながら「これで洗うといいのよ」とプラスチックのボトルを差し出した。「口に入れるものはね、クスリを使うのもナンだから、アタシはいつもお酢とお塩で洗うの。しばらく浸けておくとピカピカ

になるわよ」

試しに使つと彼女の言つとおりでた。そういえば彼女は汚れた食器もお酢を入れた水で洗う。漂白の効果があるのだといふ。彼女の台所には手の届くところに酢が置いてあつて、プラスチック製のフタにはキリで穴があけてある。ボトルを逆さまにしてお腹を押すと中身がピューッと勢よく飛び出す。

「汚れでも匂いでも自分の目と鼻を使って手で確かめながら洗つていく。こういう洗い方が好きなのよ。古いわね」

古いわね、と自らを笑いながらも、着るものでもお皿でもなんでも、洗つ作業をするときの姑はとて楽しんでさうだ。圧巻はおじいさんの代から使われているという木製のテーブルを洗うときで、この日はやはり舅も駆り出される。

月に一度、天気の良い日を選んで、ふたりはヨイコロシヨとばかりに大きなテーブルを庭に運び出す。太陽がもつとも当たる場所にそれを置いて、バケツにつめた薄い石鹼水をブラシにつけてゴシゴシ洗つ。

はじめてこの作業を見たとき、その豪快なやり方に仰天した。

木は水分を嫌うと思つていたから驚いたのだが、そう告げると姑は洗い方と同じくらい豪快に笑い、そして言つたものだった。「ずつとこうしてきたのよ。おばあさんもアタシの姑も。こつやると長持ちするつて。アタシも最初は驚いたわねえ。今じゃ、コレなしにひとつきは終わらないけど」

作業が終わると、テーブルの横に椅子を持ち出して、舅がドカンと腰を下ろす。体が痛くてたまらんとツブツブツ呟くのはいつものことだが、聞こえているのかいらないのか、「来月もよろしく」と姑が言つのもいつものことだ。

「結局、アタシは自分のココロを洗っているのよ。ココロの濁りを取つてるの。だから洗うのが好きなのね。人生つていろいろ、あるから」

姑の心の淵をのぞいたようで、私は彼女の台詞にハツとした。彼女が過ごしてきた私の知らない長い時間を想つて返す言葉が失った。横では姑がきれいになったテーブルを嬉しそうに眺めながら、ひとり静かに笑つていた。



松本 葉(まつもとよう)

神奈川県鎌倉市生まれ。1984年自動車雑誌『NAVI』の創刊スタッフとして(株)二玄社入社。編集記者のかたわら「カーグラフィックTV」のキャスターをへて、1990年渡伊。トリノにて、自動車を中心とした取材活動や『AUTO&DESIGN』の翻訳を行う。2000年より南仏在住。フリーライターとして、NHKイタリア語講座などに連載中。著書に『愛しのティナー』『伊太利のコイビト』(新潮文庫)ほか。

第四回 水の文化楽習 実践取材

おとなが楽しまないと 子どもに伝わらない

アメリカの自然教育プログラムが仙台の屋敷林<イグネ>文化の
知恵を伝えるために「地元化」するとき

今回取り上げたのは、仙台を拠点に活動展開している特定非営利活動法人（NPO）「水環境ネット東北」。「水360度！水に関わることは何でもテーマにしよう」と肩肘張らずに活動を続けてきた団体です。

水環境ネット東北が取り組んでいる主な事業に、「プロジェクト・ワイルド」という環境教育研修会の実施があります。これは野生生物から生態系保全や人間の

果たすべき役割を考えようという、米国生まれの「環境教育プログラム」。この環境教育プログラムを体験した人が地元に戻り、仙台の屋敷林（イグネ）に残る昔の暮らしを子どもたちに伝えようがんばっています。米国の環境教育プログラムがどのように「地元化」されていったのかを興味深く見てきました。



上右：特定非営利活動法人「水環境ネット東北」専務理事の高橋万里子さん。
上左：仙台市内に設計事務所を開き、まちづくり活動を行っている西條芳郎さん。
左：屋敷林の中にそびえ立つ樹齢200年の櫟。
下：その櫟の下で、イグネの暮らしを体験する子供たち。





上：若林区でも、もっとも大規模なイグネが残る農家集落「長喜城」、庄子家の入口。

左：屋敷の北側には東西に流れる水路を中心に、竹林、杉などの常緑樹、落葉樹が渾然一体の体を成す。屋敷林と呼ばれてはいるが、その密度は森レベル。この水路は、道に面した側溝とつながっているが、コンクリートで固められたそれとは、その機能が同じものとは到底思えない。



右：母家の玄関に使われている建材は、すべて屋敷林から調達したもの。下駄箱の戸板も、板戸も、上がり框（あがりかまち 土間から座敷上がる間に設けられた板敷）も継ぎ目のない一枚物。

水路に隣接した水場（右）や独立した厠（左）の配置も、他ではなかなか見ることができない、貴重な存在だ。



イグネ（居久根）

仙台では屋敷林を「イグネ」と呼んでいる。屋敷林とは、家屋の敷地内に、防風などの目的をもって植えられた樹木帯のこと。仙台平野は山から吹き降るす北西からの風が強く、主に杉、^{けやき ひのき} 檜等が植えられた。加えて、防風という目的以外にも、家普請の材料としたり、ざるやかご、桶など、日常に使われるものの素材を植えた。

屋敷林は全国にあるが、その名称は「クネ（秋田、山形など）」、「カゼグネ（八丈島）」、「カイニヨ（富山）」、「ツイジマツ（島根）」など、土地により様々。

仙台市若林区には、このイグネに囲まれた大規模農家集落^{ちようきじょう}「長喜城」が残っている。垣根を越えてイグネに足を踏み入れると、しっかりとした土や枯葉があり、用水路が内外を巡っている。中には、母屋や蔵の他にも屋敷神を祀る祠があり、イグネの北西の外側には先祖代々の墓がまとまってある。長喜城では200年以上も前から「木を伐ったら、必ず植える」と言い伝えられてきたという。



「ごっこ」は してこなかった

1993年に市民や行政・専門家が意見を交換する「東北水環境交流会」が白石（宮城県）で開催されたのを機に、特定非営利活動法人水環境ネット東北はスタートしました。毎年1回の交流会を重ねながら着実に活動を広げ、いわ

ば、市民と行政のパートナーシップを当初から意図して動いてきた団体です。1999年にはNPO法人の登録を行い、現在、NPO社員としては20数名、その他の会員は約170名、周囲のサポートまで合わせると数百名もの大所帯になります。

専務理事の高橋万里子さんは、子どもの頃から広瀬川とともに育ってきました。市民活動を結びつける役割を果たす「インターミディアリー」を20年前から実践し、さまざまな水に関わる市民活動団体を、今も仙台を拠点に結びつけています。このあたりの言葉で『居心地の悪い』という意味で使われる『いづい』という言葉があります。いづいことはやめようと

が、水に思いをもつ人々を惹きつけているようです。

しかし、高橋さんのこの自然体には理由があります。子供を育てていた頃に、PTAの先輩に声を掛けられて、生協などの役員に推挙されました。それらの活動の携わりの中で、石鹸運動や食品添加物など、環境問題に出会ったのです。

「社会活動をしていた頃、県庁の人に会って、こちらの要望を伝えるとそれだけで満足してしまうという人もいました。一方、市民活動でしつかりとした提案をしている人もいるのに、行政の側では早く帰ればいいという姿勢が見えることもあり、自分の活動へのむなしさを感じたり。一緒に活動をしている人達に『ちよつと違うのではないか』と言うと、私たちおぼさんにはわからない理屈を言われました」

そういう頃に、『広松伝さんの映画『柳川掘割物語』を上映したりして、次第に運動の輪が広がってきました。ちょうど1992年頃から、行政の側にも市民と共に自治を行う必要があるという動きも生まれ、そこからは、そこから市民と行政が協力して『東北水環境交流会』が、そして東北のネットワークづくりが始まりました。

集まってくれた人々は、口をそ

ろえて「おもしろかった」と言うてくれたそうです。当時は市民と行政の間には暗黙の対立があり、一緒になっておもしろがるというのは考えられないという時代。高橋さんたちの自然体という姿勢には、長い市民活動の経験から出てくる知恵が光っているのです。

プロジェクト・ワイルド

水環境ネット東北の活動は、「東北水環境交流会の開催」、「水環境研究会の開催」、「川づくりのプロジェクトセミナー開催」、「東日本水回廊舟運調査研究会」などバラエティーに富んでいます。中でも、昨年から始めたプログラムに『プロジェクト・ワイルド』指導者ワークショップがあります。「プロジェクト・ワイルド」は米

プロジェクト・ワイルド

プロジェクト・ワイルドは、アメリカ合衆国で幼稚園から高校までの生徒を指導する教育者向けに開発された、生き物を題材とする環境教育プログラム。参加者の気づきや理解から始まり、段階的に生態系の原理や文化などの知識、管理や保全などへの人間の役割、価値観の多様性や環境問題の構造を認識した上で、野生生物と自然資源に対して責任ある行動や建設的な活動を身につけていくことを目的としている。全米各州の教育局及び資源管理の代表者により組織されている環境教育協議会（Council of Environmental Education：CEE）が運営しており、今ではアメリカでもっとも広く使用されている環境教育プログラムの一つである。アメリカ、日本の他にも、カナダ、チェコ、インド、アイスランド、スウェーデンでも導入されている。

プロジェクト・ワイルドでは「生息地の重要性」を基本的なテーマとしている。生息地とは「ある生物の生息条件を満たす、食料、水、隠れ家、空間が適切に配置されたもの」と定義する。野生生物が生き残るために必要なのは「生息地」。

生物が絶滅の危機にさらされる最大の原因は「生息地の消失」だ。「生息地」や「生息地消失の問題」に気づき、そして最終的に自分たちが環境や生物に対して、責任ある行動ができるよう、プロジェクト・ワイルドは、次の7つのステップの項目から構成されている。

1. 気づきと理解
2. さまざまな価値観
3. 生態系の原理
4. 管理と保全
5. 文化と野生生物
6. 傾向、問題点及び結果
7. 人間の責任ある行動

（財）公園緑地管理財団のプロジェクト・ワイルドHPより引用。

「プロジェクト・ワイルド」についてのお問い合わせは

（財）公園緑地管理財団プロジェクト・ワイルド事務局にお願いします。

電話：03 3431 4865 E メール：projectwild@pfj.or.jp

ホームページ：http://ProjectWild.pfj.or.jp/





上：水環境ネットワーク東北の活動報告書 左から『東北水環境交流会1994』『'97東北水環境交流会inふくしま』『東北の「川」ワークショップ』『第2回東北の「川」ワークショップ』『東日本水回廊構想検討会』

左：みんなの情報交換の場となっている水環境ネットワーク東北の事務局。



する環境教育プログラム。環境を「教える」のではなく、「考える」か、どう対処するか、「考えること」を伝えるのが特色で、そこが普通の環境教育とは違う点です。それを水環境ネットワーク東北が、講習会として取り入れました。第2回は一泊二日で小岩井農場で行われ、市民、学校の先生など約30名が参加しました。

食べ物と棲み家になります。『鹿』の人は自分が今欲しいもの、『水・棲み家・食べ物』の役割の人々は自分がなりたいたいもの、これを同時にゼスチャーします。鹿が『自分が欲しい』と思ったものが『水・棲み家・食べ物』の中にあつたら連れてきて、今度はその人々も鹿になるし、残ったら死んでしまうという決まりを作る。それを何度か繰り返し、鹿の数、棲み家の数、水の数、食べ物の数の記録をとってグラフ化していくのです。

を、自分の日常の場でどうやって生かすかが重要なのです」
体を動かすと、心も動く
実際にプロジェクト・ワールドに参加した中には、学校の先生もいました。大友佳代子さんは女子高で社会科を教えている教師で、高橋さんとは15年来の友人です。ゲームをしている自分が楽しくて、子どもの頃に帰ったみたいだったと振り返ります。



大友佳代子さん

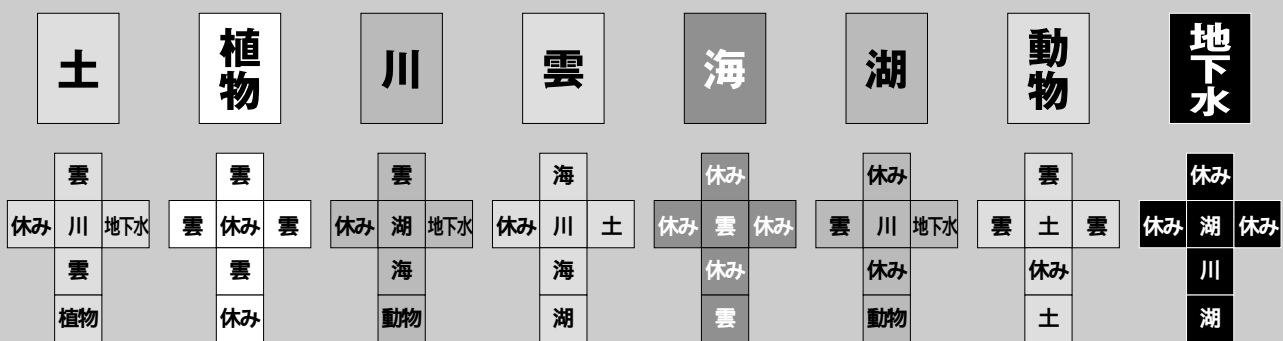
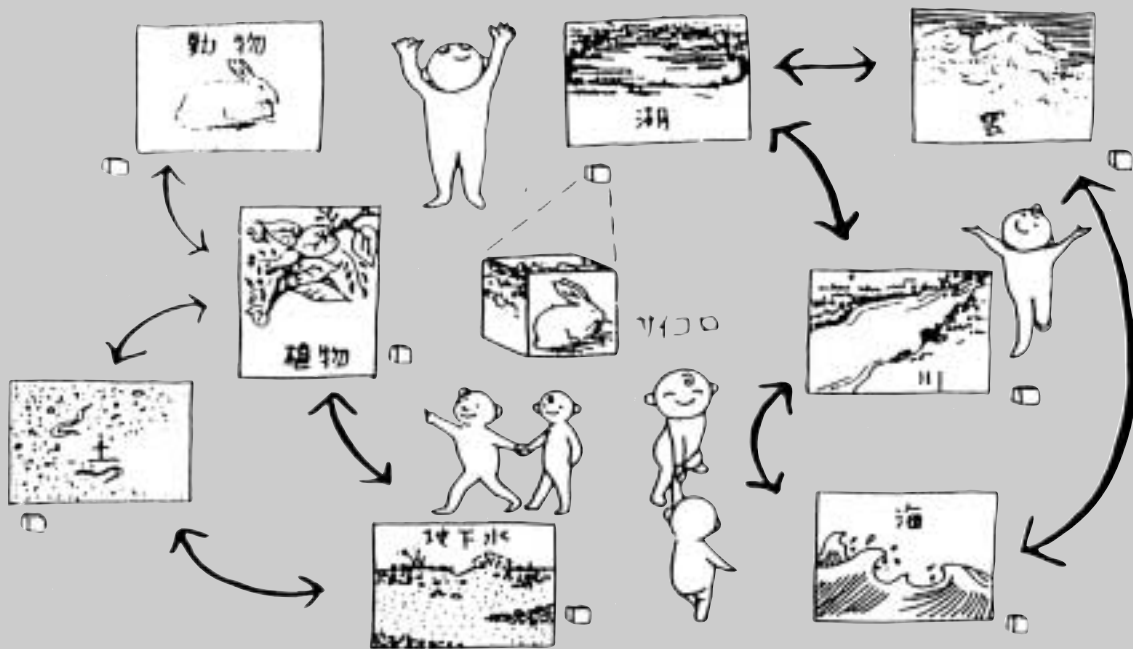
「考えることを考えるというのがプロジェクト・ワールドの真髄ですね。気づきを生むように、うまく組まれています。『オーディア（鹿）！』というプログラムは、ファシリテーターの先生が『人間は何が必要かな』と部屋の中で聞きます。参加者は『家、食べ物、水、衣服』とかいろんなことを言いますね。』では、鹿に必要なものは？』と続けて考えさせ、共通して必要なのが、水と食べ物と住まいだと気づいたら戸外へ出ます。そこで半分の人は鹿に、半分の人は水と

様子を見て先生は途中でやってきて、『みんなで水にならない？食べ物にならない？』と提案します。これは、人為的に開発が入ったことを意味します。そこからは、鹿の人にはわからないようにして、1、2の3と始める。するとたくさん鹿が死ぬけれど、ゼロにはならない。そういうことを繰り返し、終わった後に、みんな考えます。

とか小川とか学校の森があつて、そこを掃除したのが楽しかった。でも、今の子はそういう体験がないのね。プロジェクト・ワールドに参加してみても、自分の考え方が変わりましたよ。今までは屁理屈だけ。新聞読んで、テレビニュース見て、教員用の指導書読んで、10数年環境問題に携わってきたけれども、屁理屈だけでは人に何かを伝えられないと分かったこと

参加者と水の物語をつくるための双六

動物、植物、地下水、土、湖、雲、川、海の陣地の間を、サイコロを振って移動する。各陣地にはそれぞれ、次の行き先が書いたサイコロが用意されており、そのサイコロをふって『土』が出たら『土』に行く。『土』から『雲』に行く場合は、その水の形状、つまり水蒸気になりきって、水の動きを真似をする。それを記録して旅行記を書いてもらう。その後、種明かし。サイコロを降ってみてどうだったかを聞く。海に行った人は川に行けましたか？気づいている人もいますが、海に行ったら休みか雲にしかいけない。実は、各陣地に置いてあるサイコロの目も、水の循環比率を反映させて作られている。



上：陣地とサイコロの展開図 海のサイコロを振っても、6分の4の確立でそこに留まることになる。
『ファシリテーター入門』には、サイコロと陣地を上イラスト図のように絵画で表現してあったが、高橋さんたちは、簡単にできる文字表現とした。サイコロと陣地は、淡い色彩で区別されており、陣地とサイコロがばらばらにならぬよう配慮されている。



NPOエコ・コミュニケーションセンターが制作した
『ファシリテーター入門』
問い合わせ先：TEL.03-5982-8081



右：プロジェクト・ワイルドの講習会に参加したエデュケーター・小山田準さん
左：水環境ネットワーク東北の事務局長・高木恵子さん



が、青天の霹靂だった。頭だけではなくて、体を動かすと心も動くんだなと思って、生徒との接し方が変わってきたというのが自分にとって一番の収穫」

日頃は「先生」と呼ばれる立場の有識者と、似たようなワークショップを体験したことがある、と高橋さん。「そういう人たちも人に何かを伝えるという側面で見ると、『ああ、頭だけなんだな』ということがわかった。生徒は学校の先生でしたが、私には、ものすごく覇気のないおじさん、おばさんばかりに見えました。参加意欲は薄いの、ファシリテーターから指示されたことは、すぐにこなすんですね。わたしは、一つ一つのプログラムがすごいおもしろかったのに、その人たちはただ淡々とこなしていたという、妙なところに感心してしまいました」

とにかく、これはおもしろいと思ひ、東京のNPOエコ・コミュニケーションセンターが制作した『ファシリテーター入門』の「水の旅」というプログラムを参考に、さっそく水の循環を理解してもらうためのキットを作りました。

まちづくりの目から見たこと

プロジェクト・ワイルドに参加

して得た「人に伝える技術」を、水の文化の伝承に生かしているのが、地元で設計事務所を開き、まちづくり活動を行っている西條芳郎さんです。

西條さんは仕事でまちづくり活動を行っているだけに、ワークショップには縁が深い人。それでも「環境教育」というと、本当の自然環境の中で教えることしかイメージしてなかった。けれども、いろいろと道具立てをすれば、山や川に行かなくても、場所を選ばず、大勢の人に、環境について考えってもらうことができるのかと思ひ驚きました」とプロジェクト・ワイルドが教えてくれたノウハウのすごさを語ってくれました。

さらに興味深いのは、「環境教育」というと、すぐに「開発は良くない」となるわけですが、プロジェクト・ワイルドの中では、開発でもどの程度ならよいか、その場合はどのような結果を招くのか考えるメニューがある。そこが参考になったし、おもしろかったですね。子どもたちに話すときにも説得力があります」

プロジェクト・ワイルドの持つ「気づき」のプロセスが、将来のあるべき町を想像し、そこにいたるいくつかのシナリオづくりを行うツールとなることに西條さんは気がついたわけです。その西條さ

んが取り組んだのが、屋敷林と子どもたちを結びつける「イグネ探検」活動です。

イグネは家だけではなく家族を守る輪

イグネとは屋敷林のこと、この地方特有の呼び名です。屋敷林そのものは、主に防風を目的に家を囲んで植えられたもので、全国に見られます。ただ、仙台のイグネが他の地域の屋敷林と異なるのは、広瀬川から取り込んだ用水堀がイグネに囲まれた農家の内外を巡っていること。つまり、イグネとは屋敷林と用水堀が一体となったものなのです。あえて言うならば「水の文化遺産」（今も利用されているので、正確には「遺産」ではないのですが）と呼んでも過言ではないでしょう。

仙台市若林区には、このイグネが約60戸程残っています。若林区は仙台駅から広瀬川添いに仙台湾に向けて平坦な土地が広がった区域で、約13万人が居住しています。典型的な住宅地域で、仙台の「水のふるさと」と言われ、広瀬川から水を引いた用水堀が広がっています。

西條さんは10年以上前からイグネに注目していました。イグネは家を守るだけでなく、家族の歴



長喜城庄子家でのイグネ探検。
上：屋敷林では収穫まで体験できる。
右：庄子さんに、敷地内にある祠の前で「中にはとくろを巻いている蛇の像とお札が並んでいます」と説明を受ける。





長喜城のイグネは、数少ない『水』との境界線が見当たらない住宅環境と呼べるでしょう。日本の原風景をしっかりと心に焼きつけてほしいと「イグネ探検」は開催されました。右：水路にはザリガニが沢山いるのだが、近づくとも泥の中に隠れてしまう。写真中央、泥の中からハサミを2本右下の方へ突き出しているのが見えるでしょうか。



史を守る輪。地域住民の心をつなぎ、あたたかく囲むことで、地域の心のイグネを作れたらいいと、「イグネの再興」を唱えたのです。ただ、当時はまだパブルの余韻が残っていた頃で、イグネの持つ価値は地元の人々たちに十分に理解されていませんでした。郊外にはイグネがまだかなり残っていたため、あたりまえのものと思われていたこともありました。しかし、やがてイグネはどんどん無くなっていき、「若林区の住み心地の良さ」をまちぐるみで考えたいという思いも強くなってきたのです。

そこで、西條さんたちは2年前から若林区とともに「青年や子どもたちにまちのことを考えてもらう場を作ろう」と、地元の商店主・学校の先生・主婦・土木関係者など約10名のコアメンバーで、若林区の郷土の自然を知ってもらうプロジェクトを開始。その一つが「イグネ探検」だったのです。

「水で囲まれていること」が驚きだったそうです。水道が完備されながら、水が見えない普段の生活とは違う世界を、子どもたちは自分の目で発見したのです。

「たとえば、今はどろどろになった用水堀も、『これがきれいになったら、何して遊べる？』たずねると、こちらから押しつけるのではなく、自分たちで考えて感じてもらえる。子どもたちが考えるきっかけを作ればよいのです。子どもたちに、まちの歴史や環境、文化にふれる機会を提供する。大人の役目はそこまで。それをもとにどのように将来を考えてもらうかは、子どもの自由です」

西條さんは、屋敷林「イグネ」を、望ましいコミュニティのイメージとしてとらえています。

「今までのように開発をスクラップアンドビルドでとらえるのではなく、まちの歴史を知り、イグネのようにみんなで囲んで、世代をつないだ地域のコミュニティを作ることがこれからのまちづくりの考え方だと思います。すると、仙台・若林区の場合は、やはり広瀬川の活用を考えることが大切。水の流れを地元から考えると、グローバルなまちづくりに通じるのではないのでしょうか」

水の文化遺産は一人では守れない

2000年10月、2001年8月に実施されたイグネ探検に参加したのは、若林区の小学生（1～6年生）延べ人数で約30名。訪れたのは、若林区でも、もっとも大規模なイグネが残る農家集落「長喜城」の庄子さんのお宅。庄子家は200年以上もこの地で農家を営んでおり、4世代が共に暮らしています。

「自分たちの区にどういう環境が残っているのか知らない子がたくさんいる。昔の暮らしが残っているイグネの中を見せて、用水堀で大根を洗ったことか、ザリガニをとったことを話したり、庄子さんから先祖からの暮らしをうかがったりします。ブナの木に聴診器を当てて、水の音も聞きました」

庄子さんも、蔵の中の昔の蝋燭台や生活用具や農具を出して、子どもたちに見せてくれました。また、肥えだめを見たり、木のつたでブランコをしたり、七夕かざりの竹をもらってきて道具を作ったり、昔の五右衛門風呂も見せてもらったり、現代の子にとっては初めての経験ばかり。

「イグネは用水堀と一体となったシステムで、昔からかなり高度な



水利用がされてきました。今は水道だけではなく、用水堀があつて、その流れと家庭の生活がつながっているのだということを知ったことが一番良かったですね」

一方、子どもたちにイグネを案内した庄子さんも喜んでくれました。イグネを守っていくには、大きな手間と費用がかかります。イグネを伐採し住宅用地にしてしまった農家も多く、イグネを残していただくことがいかに大変かを物語っています。長喜城でも、住民が高齢化し、はたして現在のようないフスタイルを守っていくことができるのかどうか確かではありません。庄子さんも、もう自分たちだけで長喜城のようなイグネを守り、後世に残していくことは無理かもしれないと思っています。むしろ、次の世代の子どもたちにイグネの価値を知ってもらい、みんなを守ってくれば心強いと思います。子供たちの体験学習の申し出に積極的に応じてくれたのです。

入堀の総称で、木曳堀は1601年に開削されました。これは北上川から松島湾を通って続いていたのですが、その一部が現在も残っています。秋にはそこで子どもたちと船に乗り、地引き網を引いて楽しむもつとっています。運河ができたのは今から400年ほど前。そういうまちの歴史とまちづくりを考えるのに、プロジェクト・ワイルドの技術は参考になります。仙台の人々でも、北上川からこの運河を使って米を運んだということを知っている人は、意外といません。仙台港を作つたために、途中で途切れていますが、かつては阿武隈川と北上川が運河でつながっていたことも、知らない人のほうが多い」

「伝えることはできても、教えたり変えたりすることはできない。だからこそ自分が楽しいことは、積極的にするのがいいです。決して『あなたも楽しいでしよう』とは押しつけないことが大切です」と高橋さんは言います。

でも、実は二人の言っていることは「大人が楽しめない」と、子どもに伝わるわけがない」という共通した思い。それこそが「子どもにどうしたら伝わるか」ということを考え抜いて達した結論と言えるでしょう。

プロジェクト・ワイルドという環境教育プログラムが、イグネを題材にした水の文化を子どもたちに伝える活動として「地元化」していった秘密。それは、「自分が楽しいと思つたことをする」という大人が忘れかけた、人間本来の姿にあるようです。

西條さんたちは、今年は子どもたちと運河で遊ぼうと計画しています。

「若林区には貞山運河というものがあります。木曳堀、新堀、御舟

「将来を子どもに託するのは、今の大人の工程。今の大人が、きちんと自分たちの住み良い環境を作らなかつたら将来はないのに、将来の大人に将来のことを考えても



水の文化書誌

《雨乞い》

2003年3月、大阪・京都・滋賀において「世界水フォーラム」が開かれる。世界水フォーラム成功の祈願祭が2002年4月29日、京都の貴船神社にて行われた。翌日の京都新聞は「晴々、雨乞の神事が千年振りに再現された。皇室が平安中期まで晴天を願って白馬を、雨を願っては黒馬を奉納した。二頭の神馬が神職に手綱をとられて拝殿の周りを三周した」と報じた。生きた馬は、やがて描かれた馬に変わり、願い事を書いて奉納する現代の絵馬に変遷していく。

高原三郎著・発行『大分の雨乞』（1984年）では、絵馬と雨乞について、「農耕時代に入り、支配権力があらわれると彼等は君主水徳の觀念により、水、雨の順調に責任があるとされた。

早魃が激甚となると、人を殺して神へ供え、さらに時代が下がると人に代わって牛・馬が犠牲とされ、さらに生き馬に代わって木馬、紙馬を献上し、そして今日のように神社に絵馬を献上することとなった」と論じている。この書は雨乞の歴史、雨乞の習俗などから構成され、大分の雨乞をくまなく調査した結果が反映されている。また、中国、朝鮮、台湾、琉球王朝、アイヌの雨乞にも言及されている点がおもしろい。

日本各地の古来連綿と続けられてきた雨乞儀式について、膨大な資料に基づき、歴史的、体系的にまとめられているのが高谷重夫著『雨乞習俗の研究』（法政大学出版局、1982年）で、いわば雨乞研究に関するバイブルである。この中で『扶桑略記』（平安時代末期に書かれた歴史書、仏教史が中心）の推古天皇33年（625年）の条に、高麗僧惠灌に命じて雨を降らせたという記事、およそ年代記の存する限りでは、日本の雨乞資料として最も古いものである。雨乞が仏教によって始まったものではない。ただ、古代人が雨を祈ったた

あるうと思われる神々に関する伝承がわずかに存する限りである」と、雨乞の由来が記されている。さらに、日本各地の雨乞儀式が類型化されている。宮に籠るアマノモリ。水を浴びるミソギ。地蔵を水につけ、縄でしばる雨乞地蔵動物、魚類の供儀。池や泉の水を代えて乾かす水かえ行事。池に牛・馬の糞、不浄の物を入れ雨の神を怒らせて雨を降らす。山に登り雨乞の火焚き。雨の神を喜ばせて雨を降らす雨乞踊り、能楽、獅子舞、雨乞太鼓踊り、等々。

同じ著者による『雨の神』（岩崎美術社、1984年）では、飲用水や灌漑用水を水害から守るため水神を祀ることが習俗化すると述べられており、雨水を司る雨の神として龍王や龍神が祀られ、各地に雨乞社、雨の宮、雨降社、龍王社が分布するといふ。例えば、有明海北岸佐賀県川副町は干拓で開かれた地域だが、この町には雨の神と海の神の両方を祀る龍王社が存する。さらにこの書では、泉鏡花で有名な夜叉が池伝説についても論じている。

平安の初め、美濃地域に日照りが続き、美濃郡司安八大夫安次は田んぼにいた蛇に、「水が欲しい。もし、雨を降らせたら俺の娘八又姫を嫁にやろう」とつぶやいた。蛇は即座に慈雨をもたらし、蛇は八又姫を夜叉が池にむかえる。この伝説については、岐阜県坂内村誌編集委員会編『夜叉が池』（坂内村教育委員会、1987年）や、安八太夫安次の子孫といわれる岐阜県神戸町の石原傳兵衛著・発行『夜叉が池説』（1991年）の書がある。夜叉が池は岐阜県坂内村の標高1105メートルに位置し、今でも雨沢の恵みの源泉として崇敬されている。先に紹介した高谷重夫氏によると、龍とか大



霊 雲 霹 靂 雷 霽 霖 霏 露 霧 霞 霜 霽 霏 霽

1967(昭和42)年水資源開発公社に入社。勤務のかたわら30年間にわたり水・河川・湖沼関係文献を収集。昨年退職し現在、日本河川開発調査会、筑後川水問題研究会に所属。水に関わる啓蒙活動に専念している。

水・河川・湖沼関係文献研究会 古賀邦雄

蛇という型をつくり雨を乞う祈願法は、東北から九州まで広く分布するという。埼玉県鶴ヶ島市教育委員会編・発行『脚折雨乞』(2000年)では、長さ30メートルほどの麦藁の龍を雷電神社の CANDACHI の池に入れ、雨ふるたんじゃい」と唱える祭りが紹介されている。川崎市博物館資料調査室編『川崎の雨乞い』(川崎市民ミュージアム準備室・1988年)の中でも、市内の中原地区では、かつて大蛇を担いで田の中を練り歩いたと記されている。日本の各地には雨乞山、雨乞岳が存する。日照りが続くと、山に登り、鉦をならし、雨の神に祈る。西尾寿一著『鈴鹿山地の雨乞い』(京都の山の会出版、1988年)には、この有様が記されている。

少雨というと讃岐、現在の香川県だ。瀬戸内海気候のため年間平均降雨量が1200ミリに過ぎない。山地は県土の40パーセントを占め、大きな山と河川がないため、昔から水に難儀し、旱魃には泣かされ、ため池が多く造られてきた。昭和49年、徳島県池田町から、吉野川の水が香川用水によって導水されてから、河川、ため池、香川用水の水を併せ有効に利用されているが、水を大事にする県民性には変わりはない。

菅原道真公が讃岐の国司であった時、彼の祈雨で潤雨を得、その喜びに始まったと言われる香川県綾歌郡綾南町の「滝宮雨乞踊り」が今でも滝宮神社に奉納されている。香川県教育委員会編・発行『讃岐の雨乞踊り調査報告書』(1979年)には、讃岐地域の雨乞踊りについて詳しく調査されている。また、香川県大野原町田野々雨乞保存会編・発行『雨乞踊り昔と保存会春秋』(1992年)は、昭和8年の大旱魃により一時途絶えた、慶長年間から続く踊りが昭和46年に復活したという記録である。正岡子規は、「月赤し雨乞

踊り見に行かん」と詠んでいる。

雨乞太鼓踊りについては、奈良県月ヶ瀬村石打太鼓保存会編・発行『石打太鼓復活記念誌』(1989年)、同県郡村教育委員会編・発行『吐山太鼓おどり』(1983年)、熊本県宇土市教育委員会編・発行『宇土雨乞い大太鼓調査報告書』などがある。宇土は、江戸時代、細川三万石の陣屋が置かれ、農村地区では集落ごとに大太鼓を所有し、雨乞い祭り、虫追い行事に大太鼓を使ってきた。昭和61年から宇土大太鼓フェスティバルが行われるようになり、今では雨乞大太鼓が地域起こしに役買っている。

さて、朝鮮の雨乞儀式は、動物をあくまでも供え物、供儀で、日本のように雨の神を怒らせる不浄物を与える考えはなかったと高谷重夫氏は推論している。韓国の研究者、任章赫著『祈雨祭』(岩田書院、2001年)は、雨乞儀式に関する韓日比較民俗学的研究の書であり、雨乞いの国際比較を行った初の書である。古代の韓国では、旱魃による雨乞儀礼とその対策は王の責任で行われた。この災害が解消されなかった場合は、その責任をとられ、王は殺されたという。日本では、旱魃解消の責任が天皇の死までではなくならなかった。

雨乞習俗を考えると、古代から日本人と水との関わり方は深く、水の文化、食の文化、芸能の文化と大につながっていることがわかる。日本各地の雨乞習俗を絶やさないこと、絶えているものは復活させることは水の文化の発展につながる。さらに、世界の雨乞習俗の調査研究その国際比較もまた、水の文化の未来につながるものといえるだろう。





水辺の都市を読む
 ～舟運で栄えた港町～
 編著者：陣内秀信・岡本哲志
 発行・発売：法政大学出版局
 定価：本体4,900円＋税

陣内秀信・岡本哲志

『水辺から都市を読む』舟運で栄えた港町』 発行

『水の文化』創刊時より適時連載・好評を博してきた「舟運から都市の水の文化を読む」が法政大学出版局から刊行されました。1997年より継続してきた五年間の活動結果の集大成となっています。

訪れた都市は数知れず。日本の佐原に始まり、大阪、足羽川、最上川流域、瀬戸内海、伊勢湾などを起点に、中国・蘇州、タイ・バンコク、オランダ・アムステルダム、イタリア・ヴェネツィア……。舟運によって発展した都市を訪れ、徹底したフィールド調査を通して、往時の都市の構造、その豊かなネットワーク、今に続く活気にあふれた人びとの暮らしの営みなどを重層的に明らかにしています。「心地よい都市の水辺」作りの解説書としてきわめて現代的な読み方ができる必読書となっています。

目次より

第一部 ヨーロッパ編 水が彩る交易都市

オランダの港町 ホールン、アムステルダム イタリアの港町 ヴェネツィア、ブラーノ島、キオッジア、トレヴィーゾとシレーレ川

第二部 アジア編 現代に生きる水の都

中国・江南の水郷都市 蘇州、江南の運河を巡る、周庄、同里
 タイ・バンコクの水辺空間 バンコクの水文化を探る、元チャオプラヤ川を巡る、百年前に開削された運河を行く、バンコク水の都の城郭都市

第三部 日本編 埋もれた魅力の再発見

瀬戸内海の港町 庵治、尾道、鮎崎、御手洗、鞆、笠島、下津井、牛窓、柳井、伊勢湾の港町 大湊、神社、伊勢湾横断クルージング、内海、大井、亀崎、半田、他

水の文化
Information

ミツカン水の文化
交流フォーラム
2002

～もしも蛇口が止まったら～
開催のお知らせ

みなさん。もしも蛇口から水が出なくなったらどうしますか。こんな疑問を出発点に、地域で利用できる水はどこにあるのか？ その利用法は？ もしもに備え日頃からどのように水と関わるとよいのか？ 様々な疑問をみんなで考えてみよう、当センターでは『水の文化交流フォーラム』を開催します。

日時：10月29日（火）
17時30分～21時（予定）

会場：江戸東京博物館ホール（1階）
東京都墨田区横網1-4-1
地下鉄都営大江戸線「両国」駅A3出口より徒歩1分
JR総武線両国駅西口より徒歩3分

『水の文化』に関する情報を
お寄せ下さい

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水との関わり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介してまいります。

- ・ユニークな水の文化学習活動を行っている。
- ・「水の文化」に関わる地域に根差した調査や研究を行っている。

こうした情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せ下さい。

水の文化12号予告

特集「水道の文化」

くらしと水を直結するのが水道です。
水道の普及によりわたしたちの考え方や
行動はどのように変わったのでしょうか。
水道が普及する前は、
どのように水を管理していたのでしょうか。



水の文化 バックナンバーを ホームページで

ホームページアドレス

<http://www.mizu.gr.jp/>

本誌はモノクロでみなさまに配布しておりますが、写真をはっきり見たい!というご要望にお応えしホームページではカラーでバックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用下さい。



編集後記

本誌も発行丸3年を経て、今回誌面をリニューアルしました。創刊号から10号まで「水の文化とは何だろう」と編集部も手探りで進めて参りましたが、それ以上に社会の動きは早く、「水の文化」の意味を一から説明する必要もなくなってきました。この間、読者のみなさまからも数々の応援をいただきました。今後、みなさまの忌憚のないご意見・アドバイスをお待ちしております。(編集部一同)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第11号

禁無断転載複写

発行日
発行

お問い合わせ

2002年(平成14年)8月

ミツカン水の文化センター

〒475-8585 愛知県半田市中村町2-6

株式会社ミツカングループ本社 広報室内

Tel. 0569(24)5087

ミツカン水の文化センター 東京事務局

〒143-0016 東京都大田区大森北2-2-10・4F

Tel.03(5762)0244 Fax.03(5762)0246



ミツカン水の文化センター

表紙上：タイのピサヌローク、ナーン川に浮ぶ水上住宅。川の水が生活のすべてを賄っている。
表紙下：京都、貴船神社の手水所
下：ガンジス川の水の缶詰

